地方と都市を結ぶホットライン・マガジン

でぽら DePOLA

32

2007年
春夏号

特集 田舎でクリエーティブ・ライフ
交流居住 part2

宝くじ 本誌は、宝くじの普及宣伝事業として作成されたものです。

田舎でクリエーティブ・ライフ［交流居住］part2

●特集企画によせて

田舎の生活は沢山の魅力にあふれている。

夜明けを知らせる野鳥のさえずり、木々を渡る風の音、雨が走る音、眩しい太陽、しんしんと降る雪等々、忘れていた自然の中で人も生物も生きていること、移り変わる季節の中に暮らしがあることが実感できる。採れたての有機栽培野菜や山菜の美味しさ、ちょっと身体を使って汗を流すことの心地よさ、そして集落や農家の人々に支えられて暮らしていること、祭りや行事を通して、その土地特有の歴史や風土があることも発見する。

団塊の世代が定年を迎えることから、にわかに田舎暮らしや地方との交流がクローズアップされてきた。競争社会の中で、社会とは何か個人とは何か等を模索しつつも、ひたすら日本の高度経済成長時代を支え、巨大市場を生み出してきた世代で、田舎暮らしへの関心も高い。

都市の繁栄を担ったのは、地方から出て来た多くの若者たち。しかし現在も都市とその周辺で生活しており、ふるさとへ回帰する人は少ない。親は「農業では食えない」と息子たちを外へ働きに出し、老いても「帰ってこい」とは言えず、介護は行政におんぶしてきた。諸々の事情はあろうが、これらのことが過疎を加速させ、日本の農業を空洞化させたと言えなくもない。

だったら、都市の人が田舎へ移住して空家に住み、休耕地を耕やそうではないか。温泉に一泊する前に、雑木林の下草刈りを数時間手伝おうではないか。

定年になっても人生80年とすれば、まだ20年、30年という長い長い老後が待っている。過疎と高齢化がすすむ田舎では70歳はバリバリの現役、80歳でやっと老人の仲間に入れる。団塊世代の人々に、そのキャリアや労働力、技術を田舎で活かしてほしい、あるいはたまに田舎へ遊びに来てくれるだけでもいいと、過疎で悩む山村の人たちは「交流」を期待している。それに応える絶好のチャンスともいえる。

ある経済評論家は「団塊世代は退職して年金を20～30万円受け取り、90歳までにもらう額は6000万円になる。そのお金をどう使うかは日本経済にとってかなり大きな問題で、ふるさとへ戻って消費してほしい。いままで稼いだ分を行政や地域の子供達に返そう。田舎の余っている家に住み、そこで地域のために何か役立つ仕事をしてほしい」と語っている。

「ムラの未来は移住した若い世代が担う」――今回、多くのクリエーターや森林作業員、農業のプロをめざす移住者たちを取材させてもらって感じたことである。

「でぽら」30号では「田舎と都市の新しいライフスタイル――『交流居住』時代」特集をし、クラインガルテン等で週末田舎暮らしをする新しい交流居住のスタイルについても提案したが、今回「でぽら」32号では、希望する地域に移住して、積極的に地域の人々との交流や仕事・趣味生活をする"田舎暮らしどっぷり派"を主に取材した。週末に来て農園付き宿泊施設等で田舎暮らしを楽しむという"ときどき田舎暮らし派"にくらべると、築き上げて来た都市での生活を断ち切っての田舎暮らしは、収入も不安、家を新築したり農家を改装する等の出費も大きいし、奥さんや子供にも生活の変化への協力が求められる。

そこまでして田舎暮らしを実現した人たちに共通しているのは、自分達の人生設計をしっかり持っており、豊かな自然、安全な農作物を耕す土、生き物と共生する暮らしこそが、人間として豊かに生きる場所であるという信念を持っていることである。そのために身体を使うことは当然であり、地域のために役立てるならと協力も惜しまない。子供はゲーム器に代って山や里で拾った木の実や海に流れて来た貝殻を使って遊び、毎日何十分もかけて学校へ通う。どの人も驚くばかりに若々しくて明るくて輝いていた。

こんな人たちが、各地に移住しはじめて、田舎に刺激と活力を生んでいる。村人たちは、見なれた山や森、川が価値のある素晴らしいものであることや、目の敵にしてきた野生動物とも共生していかなければいけないことを、都市からきた人たちに学んでいる。

都市から移住した若い人たち、それを支援する地域リーダーが、これからの田舎の核となり、未来を創っていってくれるに違いないと思う有意義な取材であった。

あなたにも田舎の未来づくりの核になってほしい。

さあ、田舎へ行こう、ふるさとへ帰ろう。

「でぽら」編集部
財団法人過疎地域問題調査会

地方と都市を結ぶ
ホットライン・
マガジン

DePOLA（でぽら）

NO.32

●もくじ

田舎でクリエーティブ・ライフ［交流居住］part 2
●特集企画に寄せて―― 2

■まずは田舎へいらっしゃい

［北の大地］の移住・交流メニュー

・「お試し」北海道暮らし／北海道移住促進協議会――4

・東大雪の自然や文化をガイドする
［ひがし大雪自然ガイドセンター］（上士幌町）――4

・牛の世話を通じて町へ移住準備
［ピュアモルトクラブハウス］で研修する女性たち（鹿追町）――6

・NPO仲間が移住を助ける／私設北海道開拓使の会――8

・次は、移住者の相談員に――
森の生活を楽しむ金澤さん夫妻（中札内村）――8

・農業の可能性を広げる、就農希望者を支援／ゆうきの里東和ふるさとづくり協議会（福島県二本松市東和）――10

・交流で、観光地との差別化を
豊かな山の恵みの里（静岡県西伊豆町）――13

・豪雪地帯だから味わえる人と料理と住まい［にいがた田舎暮らし体験ツアー］
（新潟県上越市・十日町市）――16

■夢の田舎暮らしを実現

・豊穣な森に魅せられて山仕事
交流事業もはじまった［白い森の国］
（山形県小国町）――20

・南アルプスの山里で木工・雑穀栽培
新聞記者を辞めて木工職人に／週末通いから「終いの住処」へ（長野県伊那市長谷）――23

沖縄やんばるの森に住む

・もうすっかり“しまないちゃー”
ヤンバルクイナの保護活動も（沖縄県国頭村）――26

・芸術家たちが暮らす「ぶなかやの里」
（沖縄県大宜味村）――29

古民家に泊って里山再発見
里美「荒蒔邸」「沼田邸」（茨城県常陸太田市里美）――32

INFORMATION 34
田舎へ行こう！各地の「交流居住」事例

(財)過疎地域問題調査会からのお知らせ 35
編集後記／奥付 35

ピュアモルトクラブハウス研修棟

「にいがた田舎暮らし体験ツアー」（安塚）

炭焼き職人をめざす柳沢さん（小国町）

陶芸家山上さん（大宜味村）

カヌーに乗って珊瑚礁の海へ（国頭村／服部さん提供）

「でぽら」とは――

Depopulated Local Authorities（人口が減少した、つまり過疎化した地方自治体）からのネーミング。

過疎市町村の多くは山間地や離島など森林面積の多い農山漁村地区で、全般に人口の減少や高齢化が進んでいますが、国土の保全・水源のかん養・地球の温暖化の防止などの多面的機能により、私たちの生活や経済活動に重要な役割を担っています。このような過疎地域は、豊かで貴重な自然環境に恵まれ、伝統文化や人情あふれる風土が数多く残っています。

多くの人たちが過疎地域を理解し、過疎地域と都市地域が交流をすすめ、共生していくためのホットラインとして、また過疎地域相互間の情報誌として「DePOLA」（でぽら）を発行しています。

表紙1 ●写真
左上／沖縄国頭村の海で「きじむなあ」主催のダイビング
左中／山仕事をする吉田岳さん
左下／「にいがた田舎暮らし体験ツアー」。民宿「さわ」ご夫妻とツアー参加の女性
右上／農業をする奥山さんは農家の人からいろいろ学ぶ
右中／酪農研修をする三浦さんと大西さん（右）
右下／古民家「荒蒔邸」の内部

表紙2 ●写真
沖縄県国頭村にあるパークゴルフ場と安田集落　上／西伊豆町、ガラス工芸家の作品

「北の大地」の移住・交流メニュー

憧れの北海道だが、冬が心配、年齢的に心配、知り合いがいない等々の理由で移住をためらっている人に、幾つかのNEWメニューをご紹介する。従来からのIターン者受入れ施策に加えて、旅行気分で「お試し」ツアーを楽しむ、女性が酪農や農業を手伝いながらリッチに暮らす、団塊の世代向けの交流居住プラン、移住者や地域問題のプロなど民間人が移住を助ける制度等があり、移住がしやすくなってきた。その一例を取材した。

観光客に人気の「幸福駅」

「お試し」北海道暮らし 北海道移住促進協議会

北海道は田舎暮らしを希望する若い人達が憧れる大地。自然の豊かさ、酪農や畑作等の農業で自立する機会があること、観光地も多様なことから季節的な雇用の場も多い。それに加えて、新しく地域に来る人を歓迎する風土や、新規就農者を支援するための仕組みや制度も整備されている。

Iターン者トップの北海道だが、昨年からさらに移住や期間限定の交流居住を促していこうと北海道移住促進協議会が発足し、希望する市町村で「移住体験」をしてもらおうという取り組みがはじまった。

これは従来の若年者や壮年者を対象とした"現役世代"だけでなく、"団塊世代"の移住や、春から秋までの短期滞在型等、幅広いかたちの受け入れを行っていくもので、ネットでは「dankai-jiu」と銘打っている。

「移住体験」希望者は1ヵ月から2、3日間の日程で、市町村の宿泊施設(ホテル、住宅、体験施設)に泊って観光、仕事体験、地域交流等を行うもので、市町村によって内容が異なる(費用は実費)。移住相談窓口と担当者を設けて積極的に対応している「パートナー市町村」が14市町村、登録市町村が62町村ある。詳しくは、http://www.dankai-jiu.jp/taiken.htmlへ。

東大雪の自然や文化をガイドする「ひがし大雪自然ガイドセンター」(上士幌町)

10月下旬、帯広空港は10cmを超える雪に見舞われた。しかし帯広市を過ぎ十勝地方の内陸部へ行くにつれて雪はなくなり、ときどき雲間から日がさすこともある。空港から国道241号を一直線に北上、約1時間で上士幌町に到着した。雪はないが気温は低い。

大雪山国立公園の東山麓にある上士幌町は畑作と酪農の町。8月には全国から熱気球愛好家が一同に会するバルーンフェスティバルが開催されることで知られるが、いまは厳しさを増す冬に立ち向かうかのように牛舎の外でゆっくり動く牛たちの姿が見られる。町には日本最大と言われる公共育成牧場「ナイタイ高原牧場」があり、1700haという広大な草原では酪農家から預かった約2500頭の牛が飼育されている。

北海道の自然に憧れて移住してきた人が多いのが大雪山の東山麓に位置している糠平(ぬかびら)地区。市街地から車で約20分ほど北西に走った場所で、白樺やエゾマツの美しい山林地帯の中に静寂に包まれた糠平湖と、湖畔には糠平温泉がある。9軒の旅館やホテルがあり、温

◀森の中に点在するアーチ橋

・上士幌町企画課☎01564-2-2111
・NPOひがし大雪自然ガイドセンター☎01564-4-2261

泉街を形成しているが、観光客は温泉保養に加えて、周辺の大自然散策、熱気球体験、アーチ橋見学等を目的に訪れるケースが多いのが特徴だ。

アーチ橋は、戦時下の昭和11～14年に旧国鉄士幌線が木材運搬のために鉄道を敷き、さらに30年に糖平ダム建設時にも設置、急斜面の森や渓流、湖畔の中にコンクリート製のアーチ橋を設けたもので、廃線になったいまも大規模なものだけで10基のアーチ橋が残り、「北海道遺産」に選定されている。なかでも糠平湖の中にあるタウシュベツ川橋梁は、滅多に水面に顔を出すことがないため”幻の橋“と言われ、カメラマンが多数押し寄せる名所になっている。

この大自然を四季折々にガイドしたり、地域の啓発活動、移住希望者の相談等に乗っているのが「ひがし大雪自然ガイドセンター」のメンバーたちだ。平成9年に温泉と大雪山国立公園を組み合わせた自然体験の町にしたいと、地域（糠平温泉観光協会）と町の助成を受けて任意団体として発足し、13年にNPO法人の認定を受けた。糠平温泉文化ホール内に事務所があり、4人のスタッフがいる。

移住者は自然とすぐ向き合う覚悟を

代表の河田充さん（46）は開口一番「僕らには移住者という意識は全然ありませんね。ここの自然や風土が自分達の生活の場であり、この素晴らしさを多くの人に発信し、訪ねてもらうための仕事をしていますから。」

4人とも、ここの自然に魅せられて来て、気がついたら定住していたという人たち。だからこそ東大雪山と山麓の自然の素晴らしさや、ここで暮らす人々の生活、貴重な文化財等をひと一倍判っており、それを都市の人たちに味わって欲しいと思っている。

河田さんは岡山市、奥さんの陽子さんは倉敷市出身。山登りの時知り合って結婚。27歳の時、憧れの大雪山山麓で仮住まいでもいいから暮らそうと知人を頼って移住してきた。「10年間は糠平温泉でアルバイトで働きながら大雪山登山と自然歩きをしてきました。当時は温泉ブームで、旅館での仕事もいっぱいあったんです」

ここで生まれ育った3人の子供たちも高校生から中学生になり、陽子さんはホームヘルパーをしている。

山岳や自然ガイドのインストラクターの資格を持つ小沢克彦さん（34歳）は東京都出身。当日は休暇のため会えなかったが、「ここは山が好き、自然が好きという人がやってくる。私たちは一過性のアウトドアではなく、東大雪や糠平ならでは味わえない自然との付き合い方、身近な動植物との付き合い方を提供したいと思っています」と語っていた。2人の子どものお父さんでもある。

真冬になると凍った糠平湖はワカサギ釣りで賑わうが、ぶ厚い氷を破ってアーチ橋が浮き上がってくる。この見学を兼ねてネイチャースキーやスノーシューを体験してもらう冬のプログラムが人気コースだが、最近は山を知らない中高年の女性たちが増えたため気苦労も多いようだ。

他にスタッフは、東京生まれで10年前に来町した鴨下秀二さん（35）と、網走市出身で現在アルバイトで働く溝口玲（あきら）さん(27)。鴨下さんは子供向けプログラムを担当するヒゲが人気のガイドさん。山や河川を歩いてゴミになった空き缶やペットボトルを拾ってきた溝口さんは、一つ一つ丁寧に洗って分別している。「雪の降る前の大切な仕事です。冬の糠平はとても魅力的で、仕事があればここに滞在します」と言っていた。マイナス34度になったこともある厳寒の地でもある。

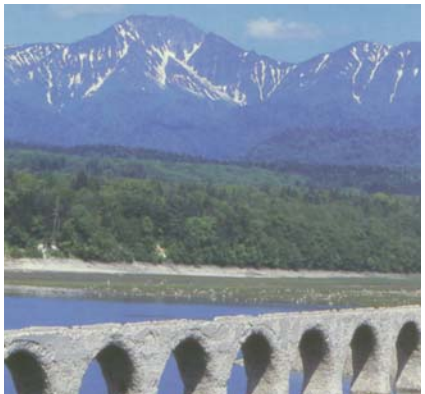
同センターの自然体験プログラムでは、会員制のネイチャーツアー（自然観察、登山）と、子供自然遊び会が各年12回、一般対象の登山やトレッキング、カヌー、自然観察会等が随時開催されている。さらに会が力を入れているのが小中学校へ出向き身近な環境の良さを教える環境教育プログラムと、登山道の整備や国立公園の清掃、トイレ管理等をする環境保全活動だ。助成金はゼロ、独立採算であるため運営は厳しいようだが、表情はとても明るい。

移住を希望する人に対して河田さんは「若い人にはパイオニア精神を持ってほしい。セカンドライフで来る人には、ここは少し厳しい環境です。自然とすぐに向き合わないと暮せないから、のんびり老後を楽しみたいという人にはお勧めできません。でも山や自然が好きな人には大変魅力的な土地で、特に若い人を迎える土壌があります」と語っていた。

なお、我々を案内してくれた上士幌町役場企画課で移住総合窓口も担当している須田修主査も、元を辿れば移住組。祖父や父親は公務員で、生まれは美唄市。企画課に配属になる前は町の「ひがし大雪博物館」の学芸員をしており、”虫の博士“といわれる大雪山の動植物の研究者で、「ここは動植物の生息地としても貴重な場所です」と言っていた。

▲代表の河田充さん

▼一部にレールやプラットフォームの跡が残っている。案内してくれた町企画課の須田修さん



◀溝口玲さん　▲鴨下秀二さん
左／糠平湖に出現した幻のアーチ橋と東大雪山

牛の世話を通じて町へ移住準備

「ピュアモルトクラブハウス」で研修する女性たち（鹿追町）

まずは田舎へいらっしゃい①

▲早朝から酪農家で働く大西恵理子さん

家族皆で支えあう酪農家の日々に感動

まだ暗い午前5時前、ピュアモルトクラブハウスを出た女性たちは、車を運転してそれぞれが契約している酪農家へ向かう。牛舎で搾乳と掃除、餌やりの作業を手伝い、8～9時頃に朝の作業が終了して宿舎に戻る。同様に夕方も4時頃から8時近くまで作業し、帰宅後は各自が部屋で食事と入浴を取って寛ぐ。

大西恵理子さん（24）が研修する瓜幕地区の河原崎牧場を7時頃訪ねた。陽がのぼり牛舎の中も庭先もようやく暖かくなってきたが、水たまりにはまだバリバリに氷が張り、牛たちの吐く息も白い。

河原崎牧場では200頭の牛を飼育しており、規模としては中規模で、瓜幕には同じような酪農家が6軒ある。搾乳作業は大半を奥さんが担い、大西さんは牛を牛舎から搾乳舎へ誘導したり乳首をあらかじめ熱い湯で拭いたり、ふん尿を片つける作業を手伝う。7時には大半の牛たちが搾乳を終えて、その間ご主人がきれいに掃除しておいた牛舎に戻り、美味しそうに朝の食事を食べていた。牛たちが搾乳を待つ間にたまったふん尿は河原崎さんのお父さんと大西さんがかき集めて、排尿溝へ運ぶ。かなり重そうだ。

「4月に研修に来たんですが、最初の2ヵ月は結構からだがきつかった。今は家の人も気を使ってくれるし、牛たちも慣れてくれて、毎日働くのが楽しくなっています」

大西さんは福岡県の出身で、熊本大学建築学科を出ている。いずれ建築の仕事に従事したいと思っているが、その前に憧れの北海道で酪農体験をしてみたいと鹿追町の産業研修生受け入れに応募した。昨年4月に入学して今年3月までの1年間の予定だ。

「もっと続けたいという気持ちもあるんですが、酪農家の大変さも痛感しました。河原崎さんの奥さんを見ていると朝4時半に作業を開始して、終ると子供たちに食事を食べさせて学校へ送り出している。家族皆が支えあわないとやってけない仕事で、自分にはちょっと自信がないなという感じです」

実に細やかに手際よく迅速に働く奥さんの姿は、取材中も強く印象に残った。

河原崎牧場では自家製の有機栽培の草を与えて飼育、高級ブランド牛乳として高い評価を受けている。最近は搾乳は機械化、ふん尿もベルトコンベアーで自動的に集め、掃除も機械化されているので、肉体労働は軽減されてきた。牛たちも出産前後のものを除いて放し飼いにされ、牛舎の雰囲気も明るく清潔になっている。必要に応じてヘルパーを雇って

・鹿追町農業振興課
（ピュアモルトクラブハウス内）
☎01566-9-7122
http://www/town.shikaoi.hokkaido.jp

▶ 河原崎牧場、ご主人（左）と機械のメンテナンスにきた技術屋さん

家族旅行もできる。しかし主婦という立場で考えると、若い女性には荷が重そうに見える。

若者に人気の滞在型研修・交流施設

町では20歳以上の女性を対象に、酪農、畑作研修生を毎年10名程度募集しているが、いまは畑作研修生が研修を終えて帰ったため、4名の酪農研修生がいる。食事を終えた後ピュアモルトのホールに大西さんと、もう一人の研修生三浦明子さんが来てくれた。

三浦さんは十勝池田町の出身で、東京で老人介護福祉の仕事をしていたが辞めて、9月に中途採用で入学した。「東京の特別養護ホームで10年働き、少し疲れました。地元北海道で北海道らしい仕事をしてみたいと思っていたところ、役場の城石さんと知り合い、この施設を紹介されました。力仕事は平気、人間関係の煩わしさもなく、可愛い牛を相手に働けて満足しています」と言う。

大西恵理子さん

三浦明子さん

役場経済部農業振興課はピュアモルトクラブハウス内にもデスクを置き、城石賢一さんが早朝から勤務している。酪農家への連絡や研修生の相談役としてなくてはならぬ存在で、研修生から兄貴のように親しまれている。

ピュアモルトハウスは市街地の一角にあり、研修生には食堂兼居間・和室、バス・トイレ付きの個室が各人与えられ、車も無料で貸出される。研修手当ても3ヵ月までは月8万円、3ヶ月以降は10万円が酪農家から支給されるので、研修生はガソリン代と部屋の光熱費を支払えばよい。平成10年に開設され、現在までに86名が卒業、うち20名が町に残り7名が結婚したという。

大西さんがぽつりと言い出した。

「私には大学で同級生だった建築家のタマゴの彼がいるので3月には一旦福岡へ帰るけれど、彼を連れてまた来るつもり。ここの魅力や酪農の仕事を見てもらいたいから」と。

隣接するピュアモルトクラブがまた素晴らしい。町で働く若者や青少年が文化活動や研修用に自由に使用できる施設として開設し、広い中庭を囲んでホール、ラウンジ、調理室、談話室があるお洒落な建物で、最新のパソコン機器や珈琲等も用意されている。登録していれば夜でも自由に利用出来るため、町の若者たちの恰好の集会施設になっている。

十勝平野の代表的な食糧基地である鹿追町には、大規模経営の酪農、畑作農家が多く、農家一戸当たり3000万円以上の生産を上げている。研修生や移住者もかなりいるものと思われ、前述した「移住体験」にも10数組の参加があった。

企画財政課の大前健也課長補佐は「若者が2～3日滞在ならピュアモルトも利用できますが、夫婦で数カ月長期滞在したいということになると滞在用住宅が必要です。多くの体験希望者を受け入れるために、古い公営住宅の改装、一戸建て公営住宅の建設を検討しているところです」と語っていた。

▼研修施設の前で、大西さん、三浦さん

上／研修生が滞在する建物
中／部屋の内部。家具付の居間・台所
下／交流施設ピュアモルトハウス外観

NPO仲間が移住を助ける

「私設 北海道開拓使の会」（本部／札幌市）

北海道へ移住した人、将来移住を考えている人への支援と情報提供を活動の目的に開設されたのがNPO法人「私設北海道開拓使の会」。会の活動は道内の企業、有志、移住者により25年程前から行われてきたが、平成6年にNPO法人として正式に発足した。札幌時計台のまん前のビルの一室に事務局があり、移住に関する道市町村の資料や情報誌「かわらばん」等を提供している他、道内外の会員が交流するイベント、インターネットによる活動情報や会員の情報提供に力を入れている。現在会員数は約3000名、約500世帯。

石黒直文理事長、水上隆史事務局長は北海道の大手銀行出身で、早くから北海道の活性化には、本州から若者や家族が移住してきて農林業や漁業に従事したり、技術や文化事業等に参加してもらうことが必要だと考えてきた。道や市町村とも連携しながら、民間ならではの人材の豊かさ、専門性を生かして、交流居住の推進に当たっている。

「移住するといっても、移住先に知人がいるわけではないから、現地の実情は自分で調べなければならない。移住しても近所に知り合いがない。だからNPOをつくった。友だちづくり、仲間づくりがこのNPOの目的です。移住する前にお世話になって、移住したらそのお礼の意味で、移住希望者の世話をやく、そしてだんだん仲間が増えればいいんです」と石黒理事長は語る。

「北の大地」への移住は田舎暮らしを志向する人にとってシンボル的存在だが、移住に対するイメージや、移住者のニーズは多様化している。受け入れる道内の企業や農林業の景気回復が遅れていることもあり、移住したくても仕事や住宅等が確保出来ないというケースも多い。開拓使の会では道や市町村、企業に働きかけて、受入れ側の体制整備や、体験、研修、交流等の事前活動の推進にも当たっている。

会には20人の相談員がおり、生活全般、住宅、法律、労働、ホームページづくり等を手助けしている。その一人、かつて開拓使の会を通じて移住を実現し、現在相談員としても活動する金澤和彦さんを中札内村に訪ねた。

居間から見る雑木林

次は、移住者の相談員に――森の生活を楽しむ 金澤さん夫妻（中札内村）

帯広市の南部に位置する中札内村は、市街地は住宅地、商業地として賑わう一方、一歩入ると平坦な農業地帯が広がり、十勝地方を代表する食糧生産地になっている。日高山脈から流れ出る札内川の流域に発展した村で、札内川は、清流日本一」に選ばれたこともある。

金澤和彦さん（43）美香さん（40）夫妻が1年前に移住した地区は、広大な畑の先にある雑木林の一角にあった。ハルニレ、ミズナラ、ヤチダモ、シラカバ等が茂り、家の前には小さな小川（用水路）が流れている。初冬を迎えた林は木々が葉を落として明るく、その中に森の中に溶け込むように建つ木造二階建ての家があった。

金澤さんが購入した土地は、川から畑までの雑木林3600坪で、500万円で購入した。家は延べ35坪、知人の帯広の建築家に設計を依頼したもので、一般には南側に大きな窓を取るが、一、二階とも北側に全面窓を設けたユニークな設計。カラマツ材を使い、家の中は木のいい香りに溢れている。一階は暖炉と窓辺にテーブル・椅子をおいた居間と、シャワールームとトイレ、電気調理器を配したこじんまりした台所があり、玄関脇に棚を

ストーブ用の薪収納小屋

十勝地方を代表する農業地帯。右手の雑木林に金澤さんの家がある

・NPO法人私設開拓使の会☎011-251-8451
http://www.kaitaku.gr.jp

まずは田舎へいらっしゃい①

建築家が設計した金澤家。道産カラマツを主材にしている

沢山設けた収納コーナーがある他は、実にシンプルですっきりとしている。テーブルに座りながら窓の外の落葉がたまった地面や木の幹、雲の流れ、風の音、小鳥たちの動きやさえずりがそのまま味わえる、まさに森の家。テレビも過多な装飾もしない木の家は、グラフィックデザイナー金澤さんの生活信条を反映したものなのだろう。

二階は、金澤さんが仕事をするデザインルームが広々と設けられ、その隣の部屋は窓辺にテーブル、椅子を配した小さな読書ルームで、奥に寝室がある。二階からは森の木々の梢が良く見え、森の風景も変化する。

「冬の寒さに耐えてきた樹々が芽吹く春が一番感動的です。森の中は最高の住処ですが、夏は木々が葉を広げるので鬱蒼として陽が射さないほどになります。蚊が多いのには閉口しましたので、来年は少し間伐しようかなと思っています。キツツキが巣を作ろうとして二階の外壁を突くのにもびっくりです」

冬はマイナス20度、雪も70㎝ほど積もるが、三重窓や断熱材等を施してあるため薪ストーブ一つで充分暖かく暮らせるという。外に設置した浄化槽ポンプや電気メーター等には小枝の丸太でそれと見えないように囲ってあった。

金澤和彦さんは茨城県常陸太田市の出身。東京の美術大学を出て化粧品会社でパッケージデザイン、奥さんの美香さんは同社で化粧品開発の仕事をしていて二人は結婚。95年に都市の生活から脱出したいと札幌市の広告代理店のグラフィックデザイナーに転職した。2年間勤めたが、札幌は東京同様都市的であるため、十勝の音更町に転居した。

そこの町営住宅に住み、田舎生活を体験しながらデザインの仕事をしているうちに中札内村で林地を販売するという話があり、現在の場所に念願の住まいを設けた。

「このあたりには東京や関西から移住してきた人が4家族住んでいるんです。昔は30戸ほどの農家があったそうですが、今は10戸程度となり、農家の方も我々をとても歓迎してくれます」

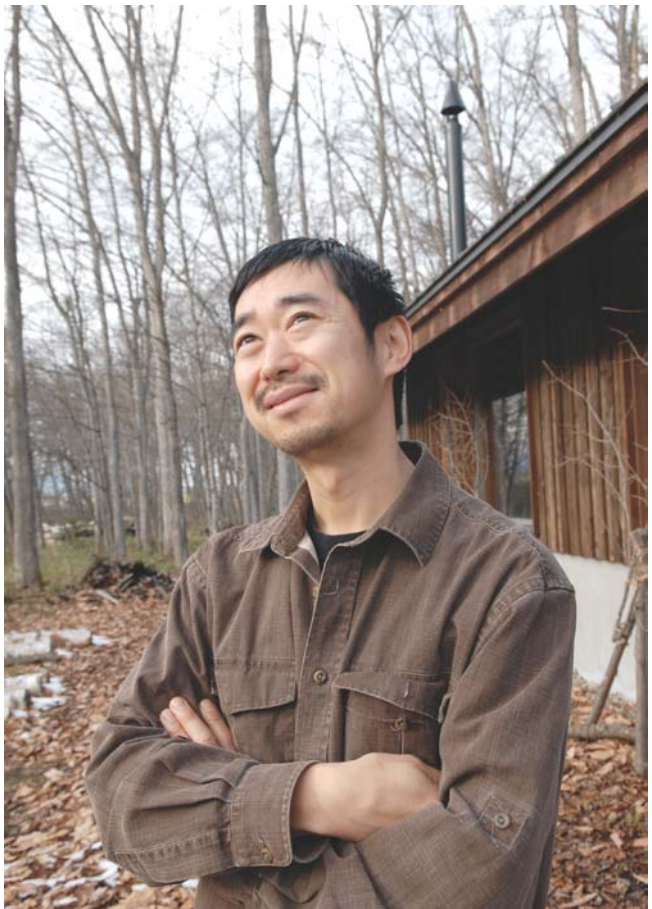
雑木林の先にある「想いやりファーム」の経営者は15年程前に神戸から来た人で、研修生を受入れて農業経営をしているようだ。金澤さんも最近はデザインの仕事依頼が多くなり、多忙になってきた。美香さんは帯広の会社に就職、車で約40分かけて出勤している。

「いまは必ずしも満足できる仕事ではありませんが、パソコン等で送信もできますから田舎にいてもやっていけます。農産物や加工品の包装やパッケージを都会人向けに提案するのが僕の夢です」と金澤さんは語る。

開拓使の相談員としては、常に移住者のための情報収集や移住してきた人との交流を行いながら、それらをインターネットで提供している。来年は奥さんの両親も近くに移住してくる予定で、すでに町中に土地を購入し建築家の姉が設計中だというから、森の家も賑やかになるだろう。

金澤さんによりきれいに手入れされた森が完成した頃また訪ねてみたい。

文／浅井登美子　写真／小林恵



▶ 家の前で金澤和彦さん
▲ 2階にある広々とした仕事部屋（グラフィックデザイン室）

農業の可能性を広げる、就農希望者を支援
ゆうきの里東和ふるさとづくり協議会

（福島県二本松市東和）

農業体験希望者の支援をする大野達弘さんと一人息子の端希君

NPO法人「ゆうきの里東和ふるさとづくり協議会」は、旧東和町が二本松市に合併する際、「東和地区の自立」を目標に住民グループによって立ち上げられた。特産品の開発や、健康づくり事業などさまざまな活動をしているが、そのなかの一つが「交流定住促進事業」。就農体験希望者を受け入れている農家の方や移住者たちに話を聞いた。

●農業の醍醐味はモノづくりの楽しさ

福島県の中央部、阿武隈山系の西斜面に位置する東和地区は、『智恵子抄』に詠まれた安達太良連峰を一望する自然豊かな農村だ。

人口8000人余り。かつては養蚕や葉タバコ栽培、畜産が盛んだったが、現在は野菜や稲作が中心。しかし、高齢化が進み、耕作を放棄する農家が増えているという。

「東和地区には今、約70軒の空き家があります。また、全世帯の1割、およそ200軒が一人暮らし、あるいは老人世帯です。いずれはその200軒も空き家になるでしょう。出て行くという人を無理に止めるわけにはいきませんが、せめて来たいという人の協力をして、残った人は元気にやっていきたいものです」

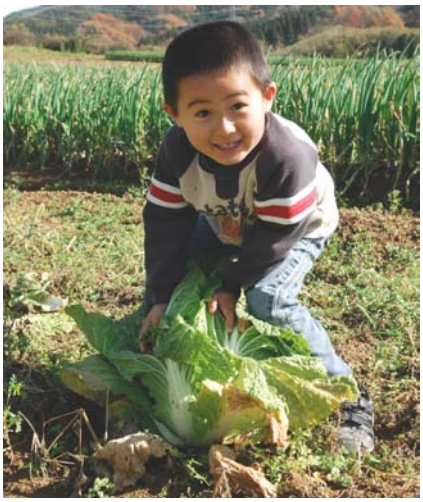
そう話すのは、「ゆうきの里東和ふるさとづくり協議会」の理事、大野達弘さん（農業）と武藤一夫さん（なめこ栽培・レストラン経営）。

大野さんは、「ふるさとづくり協議会」が設立される以前の5～6年前から、就農希望者を自宅に泊めて農業のやり方を教えたり、家探しを手伝うなど、さまざまな支援をしてきた。ちなみに、これまでに大野家で農業体験をした人は4人で、そのすべてが東和地区への移住を実現させている。

体験期間は半年から1年。食費をはじめとするその間の諸経費はすべて大野さんが負担してきた（昨年から1人につき1カ月1万円の助成金が県から支給されるようになった）。

個人でこのような活動を続けてきた原動力は、大野さんの郷土愛によるところが大きい。縁あってこの地に生まれたのだから、なんとかこの地域をよくしたいのだという。

「東和地区は農業に不利な場所だといわれます。平地が少なく、雪は降るし、降った雪はなかなか解けない。でも、自給という



▶自然の中でのびのびと、大野さん一家
▲端希君はエミューの餌やりも担当している

▲トマト、キュウリ、ネギ、米、シイタケ。大野家では20種類以上の野菜を栽培

観点でみれば、ここは豊かなところなんですよ。裏山に行けば山菜やきのこが採れる。家の前には畑があり、下に行くとたんぼが広がる。昔のお百姓さんは何でも自分の家で作って自給自足の暮らしをしていましたが、そんな本来のお百姓さんの暮らしができるのがこの地域なんです。農業をやりたいという仲間が増えれば楽しいと思いますね」

●過疎地域を活気づける新規就農者

東和地区に移住した人の中には、大野さんの人柄に惹かれて定住を決意した人が少なくない。農林水産省を辞めて東和に移り住み、農業に従事している関元弘さん（35）、奈央子さん（32）ご夫妻もそうだ。

「農林水産省に勤めていた頃、いつかは農業をと思っていたのですが、周りの人たちは『農業は厳しい』とか『農業では食べていけない』とかネガティブな意見がほとんどでした。そんな時、東和町との交流事業のような形でこの町へ来て、大野さんに出会ったのです。彼は農業の可能性を信じ、あれもできる、これもできると、いろんなアイデアを出して、新しいことに挑戦されます」

中山間地域である東和には、山や畑など、水田以外のフィールドがたくさんある。大野さんは冬は山に入ってシイタケの原木を切り、春は山菜、秋はキノコを採るなど、まさに自然そのものを仕事場として働いている。

「ビニールハウスを建てて一年中、一つの作物を栽培したり、機械を使って効率優先に、工場のように働く農業ではないんです。自然の恩恵を享受しながら、モノづくりを楽しんでいる。生き方全体が農業みたいな大野さんに会ってすごいなあと思いました」

移住前、元弘さんと奈央子さんは、東和にこだわらず、他の県も見てまわったが、結局、東和地区に住むことにした。

「田舎暮らしを決意するには、環境や気候条件だけでない何かが必要。おそらく、それは人とのつながりだと思います。大野さんをはじめ、東和で培ってきた人とのつながりが、この町に住むことを決意させたのだと思います」。

知らぬ間に家の前に野菜が置かれていることも。新規移住者の関さんご夫婦は近所の人たちから温かい目で見守られている。右は借りている納屋の2階

元弘さんは冬場、二本松市の造り酒屋で「蔵人」として働いている。それは現金収入を得るためでもあるが、もう一つの目的は、自分で育てた米や麦を使って、東和オリジナルの酒、ビールを作るため、酒造りの経験を積んでいるのだという。

将来的には循環型の農業がしたいと語る元弘さんと、自然農をめざしていると言う奈央子さん。いずれにしても、彼らにとって、田舎暮らしは目標にむかうための大切な過程でもある。

関さんご夫妻のような自由な発想をもつ移住者が、新しい情報や価値観を持ち込むことで、東和は活気づいていくに違いない。

●農業の辛さをどう楽しさに変えてゆけるか

かつて大野さんのもとで農業体験をし、3年ほど前に東京から東和に移住した奥山猛さん（62歳）も、この地域の人々に刺激を与えている。

熱心で努力家の彼は、短期間のうちに農作業の基本を習得、立派な野菜を作るようになった。また、かつて営業職についていた経験を生かして、注文伝票を作るなど、農家の人たちには考えつかない方法で野菜を販売。今ではすっかり地元の人から一目置かれているようだ。

阿武隈連峰を一望する絶景の畑で、大根の収穫をしながら、奥山さんは言う。

近所の農家、菅野さんと挨拶を交わす奥山さん（右）
普段から農業のことをいろいろ教えてもらっている

「農業っておもしろいですよ。収穫できたときの喜びは何ものにも代えがたいです。手をかければかけただけ返ってきますしね」

とはいえ、天候に左右されることも否めない。今年は雨が多くて予想外に不作だったという。

農業による収入は、前年80万円だったことを踏まえ、120万円を目標にしたが、100万円に届かなかった。翌年の種や苗を買うと、純利益はその半分ぐらい。奥山さんは年金その他の収入があるが、農業収入だけに頼る生活は厳しいといわざるを得ない。それでも、奥山さんは「東和での暮らしは自分が思い描いていた通り。100%満足している」とにこやかだ。

もう一人、埼玉県から東和に移り住んだ水竹富志夫さん(56)にも話を聞いた。彼は、サラリーマンとして働いていたが、50歳になったら田舎で好きな陶芸をしたい、と考えていたという。そして、5年ほど前、移住に反対していた奥さんを説き伏せて脱サラ。中学生だった息子さんと3人で東和へやってきた。

水竹さんは築130年の養蚕農家の古民家と3000坪の畑と6000坪の山を1000万円で購入し、古民家を工房兼住宅として改築。現在、半陶半農生活を送っている。

「東和で暮らしてみて大変だったのは、冬の雪道の不便さ。ここに住むまでわかりませんでした。あとは物価が意外に高いことですかね」

でも、自然に抱かれて暮らす心地よさや、広い土地を自由に使う快適さなど、いいことはそれ以上にあるという。

彼らを近くでつぶさに見てきた武藤さんは言う。

「田舎暮らしは楽しいけれど、厳しいことが多いのも確か。でも、その厳しさ、辛さをどう楽しさに変えることができるかが大切なのではないでしょうか」

例えば、農業には、植物を育てる喜び、収穫の喜びがある。人に差し上げて喜んでもらえるというおまけもつく。新規就農者には、そうしたことを敏感に感じられる人が多いという。

「われわれもそれを思い出して、農業はいいものだと自信をもつ必要があります。それが田舎暮らしのよさや農業の見直しに繋がるのだと思います」。

文／小田礼子　写真／小林恵

一人で5反歩の畑を耕している奥山さん

▲水竹富志夫さんの作品がずらりと並び、まるでギャラリーのような築130年の古民家

・ゆうきの里東和ふるさとづくり協議会
（東和道の駅内）☎0243-46-2113

◀二本松市太田で農家レストラン「季の子工房」を経営する武藤一夫、今子さん夫婦
武藤さんは「ゆうきの里東和ふるさとづくり協議会」の中心的存在

交流で、観光地との差別化を
豊かな山の営みの里（静岡県西伊豆町）

都心から近い人気の観光地、伊豆半島。リゾートの拠点として、伊豆の魅力はすでに充分知られているが、従来の観光とはすこし違った新しい交流が、合併して新しくなった西伊豆町で始まっている。外部の人々をより広く受け入れようという、町の意気込みは、山の猟師や炭焼きの達人たちを巻き込んで、地域を熱く動かし始めた。

ガラスの里・西伊豆町。町在住の作家の作品は緑の風とよく似合う

温泉や海水浴の伊豆。そのレッテルを剥がしてみると

西伊豆町は伊豆半島の西側。平成17年、賀茂郡賀茂村と旧西伊豆町の合併によって生まれた新しい町だ。夕陽の美しい海岸線と、堂ケ島、浮島などを始めとする温泉群が有名だが、海岸線を離れてみると、この町の魅力が大きく深く山の中へと広がっていることを知らされる。

町は従来の海辺と温泉一辺倒の観光を見直し、より多くの人々との交流を図ろうと、町の新たな掘り起こしを始めた。

海岸線を除けば、町の殆どはブナ林が広がり、深層水の湧き出でる豊かな山へと続いている。その山の糧を得て、今も山に暮らす人々がいる。

西伊豆町役場産業建設課の高橋昌子さんはそんな人たちを活かした、この町ならではのグリーン・ツーリズムを成功させようと、頑張っている一人だ。

「平成8年に県のグリーン・ツーリズムモデル策定事業として、この町に『グリーン・ツーリズム推進委員会』が設置されました。町の掘り起こしを始めてみると、海辺の漁師さんとはまた違った、豊かな山の営みの中で暮らしてこられたお年寄りが何人もいる。その人たちをなんとかこのグリーン・ツーリズムのメンバーにと考えたのです」

と高橋さんはいう。海水浴、温泉という伊豆のレッテルを剥がしてみると、そこにはまだまだ面白そうな土地の魅力が潜んでいるのではないかと、高橋さんは観光商工課の居山さんらと考えた。

田舎暮しの日常を

秋の実りの大根や唐辛子、いもがらが、庭先いっぱいに干された鈴木金一さん（73）の家。役場の高橋さんの案内で、グリーン・ツーリズムのメンバーである鈴木さん宅を訪ねたのは、陽射しの溢れる暖かな日だった。家の前の道路で、鈴木さんは機械を使って、山から伐り出した樫の木を切っていた。

「樫は堅いからね、こういう機械があるとうんと助かるんだわ。炭にするには、このウバメガシがいちばんだねぇ」

飄々とした笑顔をみせて、鈴木さんは炭焼

「山は友達のようなものさ」、炭焼き50年の貫禄をみせる鈴木金一さん

まずは田舎へいらっしゃい③

き50余年の貫禄をみせる。便利な機械が、堅い樫の幹や枝を縦に難なく裂き割っていく。

母屋に並ぶ納屋の一角には、炭焼きの長い年月を感じさせる木挽き用の鋸や縄やロープが、壁一面所狭しと並んでいる。

庭先で自家製のこんにゃくを茹でていた奥さんが、山のわさびをたっぷりと添えて、こんにゃくのお刺身をご馳走してくれた。漬けたばかりのたくわんも並んだ。

冬支度の始まった閑かな田舎暮らしの日常に、一瞬溶け込んだような新鮮な時間。こんな時間の体験こそが、グリーン・ツーリズムの醍醐味なのではないだろうか。

「そろそろ炭が焼ける頃だろう」という鈴木さんの案内で、炭焼き窯のある山の現場へ向かった。西伊豆町大沢里（おおそうり）地区。鹿の鳴き声が木々の間に響き渡る山の中腹で、鈴木さんの炭焼き窯が煙をあげていた。

「あの白い煙がきれいな紫色に変わると、炭は焼きあがるんだ」

煙はまだ白く、炭の焼き上がりにはすこし早かった。

この山で鈴木さんは、他のグリーン・ツーリズムのメンバーらとともに、観光客に炭焼き体験をさせたり、山歩きや滝めぐりのガイドをしている。

鈴木さん宅の手づくりこんにゃく、山わさびをご馳走になった

樹齢数百年のブナの木が1000本以上も広がる森や、360度の視界が自慢の山頂。暮らしの糧を得る大事な場所でもあるこの山を、鈴木さんは、宝物をそっと見せるような思いで案内しているという。

■人気は、鹿の落ち角拾い

現在17人のメンバーを抱えた西伊豆町のグリーン・ツーリズム推進委員会。山の猟師市川金男さん（69）もその主要なメンバーのひとりだ。狩り歴50年の市川さんは、町からの委託を受け、猪と鹿を専門に撃つ。大城地区の自宅には、脚の速そうな猟犬が何頭もいた。

炭焼きの鈴木さん同様、山は知り尽くした市川さん。グリーン・ツーリズム参加者には山で鹿の落ち角拾いを楽しませてくれる。

「鹿の角は、毎年タラの芽がでる頃になると、一旦自然に落ちるんです。放っておくと、ナメクジがちゃんとこれを食べる。ナメクジと鹿がこんなところでつながっているんですね。山の中には何一つ無駄がないんです」

と市川さん。参加者たちには、特に喜ばれている落ち角拾いだ。他にもニホンミツバチの養蜂も行なっている市川さんは、見学者に箱の中の蜜を絞って、瓶づめするまでの行程を見せてくれる。

猟犬たちの鳴き声のする自宅向かい側には、仲間たちが集まる猟師小屋が建つ。この日も炭焼きの鈴木さんがやってきて、昔話が始まった。

「終戦後はまず、イルカで命を繋いだなぁ、この辺は。網にイルカを追い込んで、海が真っ赤になったよなぁ。脂はソリを引くのに使ったしな」「昔は冷蔵庫なんて無かったから、猪なんかも味噌漬け・塩漬けの他は、シュロの皮巻いて、地下水に漬けたっけなぁ」

興味深い二人の話は、昔話から山の話、鹿の話、化石の話と、尽きることなく続く。

この土地に生きてきた人ならではの、こんな貴重な話が訊けるのも、この町の魅力だろう。

鹿の角を山で見つける楽しさを、多くの人に体験してほしいと市川金男さん

■大沢里を滞在型グリーン・ツーリズムの拠点に

西伊豆の秘境と呼ばれる大沢里地区。七つの見事な滝や、地下1000mから湧き出る深層水など、自然の恵みの多いこの地域で、和風ペンション「樹泉庵」を営んでいるのが、渡辺久子さん（53）だ。

グリーン・ツーリズムのメンバーとして、初

作り方も体験できる「樹泉庵」の蒸しまんじゅう。食卓にはオーナー渡辺久子さんの料理が豪華に並ぶ

期の頃から参加してきた渡辺さんは、家族の応援を受けながらも、ペンションを一人で切り盛りしている。

清潔で快適な室内と、24時間入れる温泉、そして何より素晴らしいのが、渡辺さんの料理だ。土地柄と季節を活かした一品ごとの創意工夫に、思わず目を見張る。

グリーン・ツーリズムへの彼女の思いは深く、「まるごと自然体験」や「月見会」という町の行事で、お饅頭やコンニャクづくりを教える他、宿泊客にもさまざまな体験をさせてくれる。

「ここは過疎化が進んで、年寄りが多い集落なので、昔の知恵や工夫が普段の暮らしの中に、詰まってるんです。グリーン・ツーリズムで体験してほしいのは、そんなことも含めての、この土地の自然や暮らしですね」

渡辺さんはお年寄りこそが町の財産だという。

グリーン・ツーリズムのメンバーは、他にもペンション経営、わさびづくり、料理屋経営、農業などさまざまな人がいる。町は、毎春行なう「まるごと自然体験」の山歩き参加者全員の保険の掛け金や、パンフレットやハガキ作成費用などを負担し、活動をサポートしている。

ガラス工房「光箱」(ライトボックス)の辻晋吾・井田未乃夫妻

■交流事業のもうひとつの柱、ガラス工房

大沢里地区から海岸沿いに拓けた宇久須地区へ向かうと、黄金崎クリスタルパークというガラスの美術館が見えてきた。ガラスの里として知られるこの地域には、他県から移り住んできたガラス作家の工房が多い。

ガラス工房「光箱(ライトボックス)」の辻晋吾さん(46)井田未乃さん(36)夫妻も、そんな移住組の作家だ。以前は山梨県のガラス工房で作品づくりをしていたが、結婚を期に独立を考えていた矢先、旧賀茂村がガラス作家を誘致していることを知り、移り住んできた。

工房に続くしゃれた二階建の住まい。

「土地は村から借りて、その土地の上に、これも又、村の融資を受けて建物を建てました。村は大変協力的で、いろいろな形で活動を応援していただいています」

とご主人の辻さんは話す。

旧賀茂村、今は西伊豆町となったこの町がガラス作家の誘致にこんなに熱心なのには、訳があった。その辺の事情を役場の観光商工課居山繁さんが話してくれた。

「旧賀茂村の山はもともとガラスの原料であるケイ石の産地なのです。最盛期には日本の板ガラスの8割近くを産出していました。文化として、こうしたことをもっと広めようと、作家の方に住んでいただき、美術館を作り、ガラス文化の里づくりを目指しています」

美術館には辻さんたち西伊豆町在住の作家の他、世界のガラス造形作家の作品が並ぶ。工房によっては、吹きガラスの体験も可能。

新しい人を受け入れ、郷土の文化を発信する西伊豆町は、従来の観光とは一味違った素顔の町の面白さを、訪れる人たちに体験させてくれそうだ。

文／金山淑子　写真／小林恵

仁科川上流にある大沢里地区

・西伊豆町グリーン・ツーリズム推進委員会
(役場産業建設課内)☎0558-52-1111
・黄金崎クリスタルパーク☎0558-55-1515
・ペンション「樹泉庵」☎0558-58-7177

豪雪地帯だから味わえる人と料理と住まい

「にいがた田舎暮らし体験ツアー」

（新潟県上越市・十日町市）

日本有数の米どころ、酒どころ、そして豪雪地帯でもある新潟県旧東頸城（くびき）地域。6町村が合併して上越市、十日町市になった2年前から「にいがた田舎暮らし体験ツアー」を秋と真冬の2回開催している。同地域は、以前から「越後田舎体験事業」に力を入れ、首都圏の小中学生を対象に自然・農業体験活動を行ってきたが、さらに一歩進めて、都市に住む人たちに移住や交流居住をしてもらうための特別企画である。

絶好の秋日和、11月2～4日の連休を利用した第3回ツアーに本誌も参加させてもらった。

まずは田舎へいらっしゃい④

▶まつだい駅に集合したツアー客

豪雪に耐える民家の見学

東京からは上越新幹線の越後湯沢駅でほくほく線に乗り換える。ほくほく線の新車両は広い窓から間近に移り変わる風景が楽しめる旅情ある路線。車窓から刈り入れが終った山里と紅葉が始まった山々を眺めているうちに、ツアー集合地のまつだい（松代）駅に到着した。10時12分に東京駅を出発して12時50分着、2時間半という近さだ。

駅舎には新潟の物産を売る売店があり、ツアー参加者らしい人たちが早くも土産品を吟味している。駅前で迎える主催者に参加費2万円を支払う。2泊3日すべての体験料に加えて、趣向をこらした6食付き（名人のどぶろくや越後の酒付き）でこの価格、しかも新米コシヒカリ1kgのプレゼントもあるというサービス満点の料金だ。

今回参加した人は27名。若い女性の姿も見られるが、全体では中高年者が多く、70歳過ぎの男女グループも数組いる。

午後1時、駅前広場に集合したところで、にいがた田舎暮らし推進協議会佐藤健一会長が「合併して上越市になったが、旧町村の組織を継続して地域活動をしていきたいと思っている。過疎が進んでいるので、都会の人にどんどん来てもらい住んでもらいたい」と挨拶。ツアー担当者から説明があり、3台のマイクロバスに分乗して、全員で民家を見学に行く。各地で移住のための体験ツアーが企画されているが、民家を見学するコースがあるところは少ない。

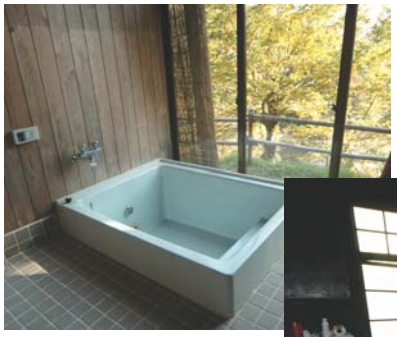
最初に見学したのは松代地区の市街地の中にある一般住宅。今回地区の世話人としてご足労をかけた若井明夫さん（土地家屋調査士）が交流活動の場として空き民家を購入して改装したもの。

一階は囲炉裏のある居間、台所と、奥に味噌や納豆づくりを体験するコーナーと味噌保存室、二階は畳敷きの和室が4室ある。若井さんは都内の消費者グループに有機野菜や農産物を直売しており、彼等が時々訪れてこの民家を利用するという。

次に見学したのは山間集落にある古い大きな農家。一階には天井が高い広い部屋が幾つかあり、二階にも和室の居間部屋が2室ある。この家は交流・宿泊施設としてかなり手を加えたもので、窓辺に大型風呂、数人が利用できる洗面所を新設、グループが囲炉裏を囲んで食事できる居間は吹き抜けにした。さらにガラス戸はすべて風雪に耐えるように整備し

▲松代市街地にある貸し民家「みらい」

▲豪雪にも耐えるよう整備された民家「みらい」



▶▲囲炉裏のある吹き抜けの居間と改装された風呂

なおしている。貸し民家「みらい」と名付けられている。

「この辺りは豪雪地帯なので農家は家屋敷にお金をかけており、外壁も柱も天井もしっかりしています。雪は2～3メートル積もりますから、池を設けて雪を溶かす場所にしたり、家の下の斜面に雪を落とせるように工夫しています」と説明があった。この民家は20人まで宿泊でき、一人3800円で利用できる。

三番目に訪ねたのは旧大島村の農家。周辺には杉の巨木やブナ林があり、屋敷の真ん中にも樹齢数百年のブナが一本立ち、美しく落葉している。息子たちは町へ降り老婆が一人住んでいたが、昨年の豪雪を体験してから息子たちと同居することにしたという。

土台に必ず石を敷いてクリ等の丈夫な木を組んであり、床や外壁もしっかりしているが、一人暮らし用に天井を低くしたり部屋を区切ったりしているため、木造民家の良さが見えてこない。100万円ほどかけて改装するというが、同席した大工さんは「100万円ではたいしたことは出来ないが、窓をすべてアルミサッシにして、壁紙を張り替えます」と説明してくれた。二階にも部屋があり、子供が住んでいたのかビートルスの写真が貼ってある。この家は茅葺きの家をトタン板で覆っていた。

空き民家の場合、生活していた諸々のものや新建材をすべて撤去すると、使い込まれてきた貴重な木材が姿を現してきて、古民家の良さを生かした家が再生できるに違いない。しかし改装費はかなり高額になるだろう。参加者は、このような民家を見て、地域の大工さんから説明を聞くという機会は滅多にないので、熱心に質問をしていた。

民家を再生して民宿経営

雑誌で紹介されるような見事な民家、それがほど近い大島板山地区にあった。見晴しのいい丘の上に立つ真新しい感じの家だが、農家を改装した民宿「伊作」。玄関の格子戸を開けると、骨董品や石や鉄のモダンなアート品を何気なく置いた玄関と木のテーブルのある団欒コーナー、そこで靴を脱いで上がると、20帖ほどある広い居間があり、中央に10数人は座れそうな囲炉裏がある。吹き抜けの天井で、磨き込まれた古い柱や梁が生き生きと張り巡らされている。ご主人が手製で作ったというケヤキの丸太のミニテーブルが10個ほどあり、これがお膳代りになるという。

居間の奥にはご主人の寛ぐ和室と、奥さんが趣味と実益を兼ねて「紡ぎ」を織る工房がある。二階には宿泊客が泊る部屋が大小3部屋あり、バス・トイレも木の香りに溢れたお洒落な作りだった。

この家をご主人に紹介し、改装工事を行ったのが地区会長で建築業を営む小山章喜さんだった。小山さんがここに至るまでの簡単な説明をした。気になる工事費は「1500万円ほどということにしておいてください」と答えたが、2000万円はしているだろうと誰かが言う。

ご主人の生まれは金沢市で、親は寿司店を経営していた。東京や栃木で建築関係の仕事をしていたが、リタイアしたら上越地区でのんびり暮らしたいと2年前に空家を探しにきた。上越は金沢と子供達が暮らす栃木の中間点にある。金澤育ちのご主人には雪も田舎暮らしを彩る冬の風物詩であり、気にならないという。

工事費が心配だったが、小山さんの「俺にまかせとき」の言葉に励まされ購入、改装が始まった。工作の好きなご主人は2週間に一度来て作業を手伝った。しかしまだ雪を経験していないので、「今年の冬から雪の中の暮らしが始まります」と奥さんは少し心配そうだった。

民宿は夏から営業を開始した。加賀育ちでグルメだったご主人が腕をふるう日本海の鮮魚と新潟の旨い酒がたっぷり味える宿だと早くも評判を呼んでいるようだ。

「のんびり暮らしたいと思ってきたんですが、そうはいかなかった。板山は14軒あり30人が暮らしている小さい集落で、老人だけの家も多く、共同作業には大事な人手としてかり出されます。でもそれも楽しいかな。小山さんのように地域のために一生懸命やる人がいるから安心です」とご主人は言う。

地域の人と「共同で共働する」楽しさ

民宿「伊作」に顔を出してくれた植木努さん（67）は、9年前に神戸市から夫婦で旧大島村田麦に移住してきた人。鉄鋼関係の会社に40年近く勤め、子供たちも独立したので、定年後は越後で農業と山歩きをして暮らしたいと思っている時、テレビで「日本のチロル大島村」という番組を見た。生まれは柏崎市、多少の雪には動じない。植木さんは大島村に人目惚れし、早速移住したいと役場に手紙を書いた。丁重な返事をもらい集落に何度も足を運んだ。区長の小山さんと知り合い、空き家を購入して約1000万円かけて改装した。裏手にブナ林が広がる地区で、家は二

▲全面的に改装した民宿「伊作」

◀居間で説明を聞く参加者。古い柱や梁がよみがえり素晴らしい空間。二階が宿泊客の部屋

▲3番目に見た大島地区の茅葺き民家

▲民宿「伊作」　▼上越移住を楽しむ植木努さん

階建て55坪、8部屋ある。

「田舎ではクルマが必需品なので60歳にして二人で免許を取りました。雪かき、草刈り、神社の清掃など地域の共同作業には必ず参加します。集落ではことあるごとに力を合わせ、集いの度に食事や酒を楽しむ。共同であり共働の生活です」と植木さんは言う。

ネイチャーインストラクターの植木さんは各地から来る子供達の体験学習の指導員や15、16人単位で山をガイドする仕事をしている。「雪国の山村、美しいブナ林の魅力を知ってもらうやりがいのある仕事です。ここは四季の移り変わりがはっきりしているのがいい。鳥の声、虫の声、風の音、自然と一体化して暮らせます。初夏はホタルがいっぱい飛んでいます」

奥さんは有機野菜に精を出すほか、「うんめぇもんチーム」という地域の食材を使った料理グループの一員としても活動。夫婦とも多忙で充実した毎日を送っている。

田舎暮らし成功の鍵は「頼りにできる人がいるかいないかということ。こういうツアーは頼りになる地域の人を知るいい機会です」と植木さんは語っていた。

田舎料理と「どぶろく」でおもてなし

民家の見学と移住者を訪ねたあとは、分散して松代の民家「みらい」、大島の公営民家「庄屋の家」、安塚の民宿「さわ」の宿泊先へ向かう。夕食の前にそれぞれの地区にある公共温泉でひと風呂浴びるというサービスも用意されていた。

我々の宿泊は松代の民家。大島地区の主婦たちがこの日のために用意してくれた田舎料理が重箱等に入ってたっぷり届けられた。ウド、ゼンマイ、ワラビ、ズイキ等が各々素材ごとに調理を変えてあり、ちまきと野菜たっぷりの汁もある。さらに名人たちが仕込んだどぶろくと新潟の地酒付き。ここはどぶろく特区第1号地で、4人の蔵元がいる。私たちは有機農業にこだわる若井明夫さん手製のどぶろくに舌づつみをうった。

若井さんは若い時東京で7年間暮らし、測量や司法書士等の資格を多数取得した。帰郷してみると若者は都市へ出てしまい休耕している田畑が多くなっている。

「農業をなんとかしないといけないと痛感しました。でも5反歩の農地ではとても食べていけない、安全で新鮮なものを作り、それを豆腐や納豆、味噌、漬け物等に加工して付加価値をつけ、都市の人と顔の見える交流をすることだと思いました」と若井さんは振り返る。

自ら無農薬の農作物栽培を実践した。休耕地を借りたりして1町2反歩で大豆栽培、出来上がった豆腐は京都では1丁1000円で売られるという。空家がでると若井さんに買って欲しいと連絡が入るため、現在空家5軒を所有している。この家は「都市の人に貸出したり（1ヵ月5万円）、味噌づくり、そば打ち等の体験の家として活用している。

「20世紀の反省に立ち、21世紀は田舎を見直す時。民家みらいにはそんな思いがあります」と若井さんは言う。

ただ我々が宿泊した民家は、寝具への気配りが不足、トイレも階下、洗面所がない等から、旅行気分で来たツアー客からは「もう少し利用者のことも考えてほしい」という意見が出された。

同宿した川口市からきた会社経営の男性（50）、ヨガや自然食にこだわっている大宮市から来た男性（50代）は、田舎暮らしを前向きに検討しており、特に大宮市の男性は炭焼きをしたい、そのための準備や研修等を勉強中だった。東京文京区から参加したご夫妻は田舎が好きでグルメで年中旅行をしているようだが、民家を借りて野良仕事をするより、別荘でも購入するのがふさわしいとお見受けした。

翌朝は山菜アラカルトの豪華朝食を味わったあと納豆づくり体験。大きな釜で茹でる大

▲凄いごちそう、「みらい」での朝食風景

熱いご飯と味噌汁等を持って宿へかけつけてくれた大島地区の女性たち

お母さんたち手づくりの料理

差し入れのどぶろくを持って。ツアー担当の地域振興課佐藤さんらが3日間手伝ってくれた

豆の芳しい匂いが家中にたちこめ、熱々のふっくら大豆と藁が用意された。藁に包んで整える単純作業だが結構難しい。1日寝かせて発酵させた納豆は帰京日にお土産として配られた。そのあとは大豆の育つ畑へ出かけていった。

安塚須川にある民宿「さわ」では朝食の後、皆で経営者吉田良一さんの畑へ行き大根掘りをしたあと、帰ってから餅つきを楽しんだ。山麓の水田で育てたもち米は品質が優れ、お餅の出来も上々。それを餡ころ、きな粉、下ろし大根等にして昼食でいただいたが、皆「美味しい」を連発してよく食べた。

吉田さんは都内と入間のデパート物流センターで働いていたが、10年前に奥さんの実家がある安塚にIターンし、スキー場がすぐそばにあることから民家を改築して民宿を始めた。趣味で陶芸や絵画を楽しんできたので、仲間の作品を展示するコーナーも設けて民芸民宿として特徴を出している。1階は広々したレストランと農業用納屋他、2階は手入れのよい部屋が10室ほどあり、旅館以上だと参加者から喜ばれていた。

「スキー客は減っていますが、第二のふるさととして利用してくれるリピーターが増えています」

米も野菜も全部手づくり、ウコッケイや地鶏も飼って宿泊客に提供するなど、農業にも料理にも意欲的なご夫妻で、参加者から好評だった。

「さわ」には9名が宿泊、杉並区からグループで参加した70代の元気な"仲良し同級生"たちがいる一方で、2人の独身女性の姿も。

名古屋市から参加した中尾智子さんは保育士の資格を持ち障害者の施設で働いている。「昔から野原で植物や昆虫取りして遊ぶのが好きでした。田舎で暮らしながら、子供や障害者の福祉関係の仕事がしたいとこのツアーに参加してみました。主催者の対応が手厚く、参加者ともいろいろ交流できてとてもいい旅です」

中尾さんと同室に泊った75歳の老婦人は浦安市から参加、「いつも一人で都内へ出かけたり旅行も楽しんでいます。移住はもう出来ないけれど、ふるさとのつもりで気軽に来れる田舎ができました」と喜んでいた。

午後は休憩したあと、スキー場の裏手にあるブナ林へキノコ狩りに出かけた。案内には地元のインストラクターのキノコ名人がガイドしてくれ、素人も次々と天然キノコを取ることができた。夜はキノコたっぷりの鍋を堪能したという。

それにしても安塚にも大島にも美しい見事なブナ林が身近にあり、人に踏み荒らされることなく自然林として保全されている。至る所に点在する棚田には、土が乾いてひび割れするのを防ぐため水が張ってあり、空や雲を映して輝いている。雪深い里山の人たちは自然と共生することを誰よりも知っていると思った。

なお年が明けて2月17、18日には「本格雪堀り体験ツアー」が実施され、このツアーに参加した何名かが申し込みをしている。

●ツアーに参加した人の意見

参加者の年齢は50代が最も多く38%、60代が25%、70代が17%であった。参加の理由は「当地を訪ねてみたかった」が9人、「将来二地区居住を望んでいるから」4人、「田舎暮らしを望んでいる」3人となっている。

ツアーの内容でよかったものは「夕食・交流会」「温泉入浴」「秋野菜の収穫」が高く、「民家の見学」ではどちらとも言えないが多かった。不安に感じたこととして「地域とのつながり」を10人があげ、他には買物、医療、仕事、住宅の順。感想文を読むと、宿泊場所により差があるが、殆どが参加したことを喜び、関係者の誠意ある対応に感謝すると回答していた。

文／浅井登美子　写真／満田美樹

紅葉が美しいブナ林へ入ってキノコ狩り

上越市地域振興課☎025-526-5111

▲民宿「さわ」で、吉田さん夫妻と中尾智子さん（右）

▲貸し民宿「みらい」のオーナーの若井明夫さん

▲茹でたての大豆で納豆づくり体験

◀吉田さんの畑で大根掘りを楽しむツアー客たち（撮影／安塚区総会事務所・小林健吉氏）

■夢の田舎暮らしを実現

豊穣な森に魅せられて山仕事

交流事業もはじまった「白い森の国」

（山形県小国町）

根曲りした杉の伐採をする吉田岳さん

飯豊連峰、朝日連峰の山裾に広がる小国町の自然にひかれて移住してきた若者たちがいる。登山ガイドをしながら森林業を営なむ吉田岳さん、炭焼き職人をめざして念願の窯を持った柳沢悟さん等7～8名。町の移住者の受け入れはまだ始まったばかりだが、ブナ林を生かした交流事業も順調にスタート。町にはIターン青年たちに暖かい手を差し伸べるマタギの親父さんたちがいる。

「山が好き」だから林業と山岳ガイド

取材に出かけた日はあいにくの土砂降りで、紅葉の山も里も霧に覆われている。小国町総務企画課仁科清春主査と渡部由美さんの案内で、町内大石沢地区に住む吉田岳さんを訪ねた。

吉田岳さん（37）は妻久美さん（39）と長男渓君（2歳）の3人家族、古い民家を借りている。「何しろ山が好きで――」という吉田岳さんの選んだ仕事は、林業と登山ガイド。小国山岳会のメンバーで森林インストラクター。「山形の山はおまかせ」という自負を持っている。

6～12月までは町の森林組合や個人から委託されて造林作業（植林、除間伐、枝打ち等）をし、依頼があれば個人の庭木剪定や造園も行う。冬は自身で冬山を楽しむと共に冬山登山ガイドや除雪仕事等を行っているが、春から秋の間も山岳ガイドの依頼があればそれを優先している。そのため小国町に移住してきた頃は森林組合に入団して働いていたが、インストラクターの仕事と両立させるために独立して、林業作業を請け負う形にしている。

「森林組合から造林作業を委託された林の総面積は約60町歩ですが、林道がなく沢を登っていく山が多い。班のメンバーは皆町外からの移住者ばかりの若者4人で、柳沢君のように他の仕事と両立しながら働く者もいます」

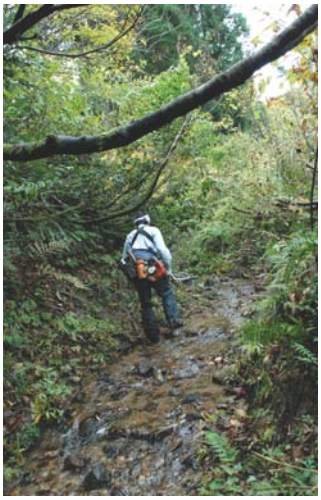
山形市生まれ、若者のフォレストワーカーを養成することで知られる信州大学農学部森林科学科を卒業、在学中はスキー山岳部に入り、卒業後は海外の山々を踏破してきた。飯豊の山々に魅せられて平成6年に小国町へ移住し、山岳隊「らっせるまん」を結成し、趣味と仕事の両面から"山男"を続けている。

「岳さんと出会ったのは飯豊連峰でした」と言う久美さんも山好きで、吉田さんの仕事や趣味の一番の理解者でもある。

吉田さん一家が借りている家は、以前作業所として使われていた家で古くて間取りも良くないが、久美さんの手で暖かく使いやすく工夫されている。「ブナ材の丈夫な家です。冬には雪が4m積もることもあるので一階は埋もれてしまうんですが、かえって暖かく明るくなるんです」と言い、雪国での田舎暮らしを気にする様子はない。

久美さんは名古屋市の出身で看護師をしていた。「そろそろ仕事の話もあるんですが、

▲妻の久美さんと渓君（2歳）、吉田さん



作業中の山は急斜面の沢を登った先。かかえる道具がずっしり重い

念願の炭焼き 窯は完成したが小屋の雪囲いはまだ。作業する柳沢悟さん

良質な白炭“白い森の白い炭”を手に柳沢さん

今は子育てと農的な暮らしに専念しています。看護婦は人の命を預かる仕事ですから、片手間では働きたくない、いずれきちんとしたかたちで復職するつもりです。小国は自然がいっぱいで子育てにとてもいいところです」

吉田さんは自給する程度の米と野菜も無農薬でつくり、農家へも手伝いに行く。玄関の土間には収穫したじゃがいもや玉葱が置いてあった。取材中、隣の部屋で熟睡していた渓君を無理矢理起こして撮影させてもらう。

翌日は快晴となり、山仕事をする吉田さんを現場付近まで訪ねた。クルマには林業作業に必要な機器類が搭載され、我々のために昼に下山した吉田さんが待っていてくれた。ここから急斜面の沢を20分ほど登ったところに間伐をする杉林があるらしい。少し休んだ後、身支度を整えた吉田さんは、また山に帰っていった。

人の気配がない静かな里山の秋である。大石沢地区には移住者も何人かおり、よその人に開放的な風土だという。農業体験を重視する私立の基督教独立学園高校が近隣の可水地区にあり、卒業後も農業をしたいという若者は吉田さんのような移住者の先輩を頼って大石沢地区に集まるということのようだ。

皆に助けられて炭焼き小屋が完成

続いて移住者のひとり、柳沢悟さん（27）が開設した炭焼き小屋を訪ねた。

役場に比較的近い国道沿いに、木造の建物が見えてきて煙りが出ている。建物はまだ建築中で、一部にビニールシートを被せ、その中で柳沢さんが働いていた。しっかり組み立てられた窯があり、あと2～3日たてば炭出しだという。

「今日は凄い雨で小屋の中まで水びたしになりそう。雪が来るまでに小屋を完成しなければならないので、あせっているんです」と床の木片を退かして我々の立つスペースを作ってくれ、土で汚れた顔を拭く。

「山好きで面倒見のよい斉藤さんに、今の家の紹介から窯設置の土地、炭焼き小屋作りまでお世話になりました。他の材は炭焼き師匠と一緒に山から切り出し、足りないものはマタギの仲間が用意してくれました。古窯を解体して運搬、15人以上の人が手伝ってくれて完成しました。大阪から来てくれた人もいて本当にありがたかったです」

柳沢さんは千葉県松戸市の出身。文科系の大学を出たが、子供の頃祖父の農業をする姿が好きだったので農業に憧れ、埼玉県の有機農家で研修をはじめた。その後、静岡の牧場で働いて資金をためながら農家を巡る。

農業経営の厳しさも感じていた頃、小国町で炭焼きや山菜取り、マタギをやって自給自足の生活をしている人に出会い、「これなら出来る」と思い、移住してきた。マタギにも興味があり、春には熊猟に参加したという。吉田岳さんの山仕事を手伝うこともある。

「炭の材はここらではナラの木です。雪と闘っているので密度が濃い品質のいいものが作れます。森林組合と東京のレストランに一部出荷していますが、今後は“白い森の白い炭”として良質の白炭を焼き、使ってくれる人の顔が見える直販をしていきたいと思っています」と語っていた。

ブナ林、里山を「体験交流の場」に

山形県最南西部にあり新潟県と接する小国町は、山形県内で二番目に広い737・5㎢という面積を持ち、東京23区がすっぽり入ってもまだ余る。飯豊連峰、朝日連峰の山裾にあるため町内にも森が多く、山林面積は95％。そのうちの約78％がブナやナラ等の天然広葉樹林である。町はブナの白い幹と町を覆う雪に共通する「白」から、町全体を「白い森の国」としてアピール、交流事業に力を入れている。広大なブナ林は全国に6カ所ある「森林セラピー」基地の一つに選定され、温身平（ぬくみだいら）には散策路が整備されている。昨年10月には医師、臨床心理士、栄養士参加によるパイロットプロジェクト事業が3日間行われ、参加した20人の女性たちから大好評だった。

「当町は法政大学岡崎昌之教授から長く指導を頂いており、昨年は先生のゼミの学生が20名合宿して住民とも交流しました。住民による『小国町交流まちづくり研究会』（会長／本間信義氏）も発足し、交流居住についても勉強しています。移住者に閉鎖的な地区もあり雇用の場も少ないという課題もありますが、町としても空家住宅や未利用農地の活用を検討していきたいと思っています」と仁科主査は言う。

最近はマタギのガイドによるブナ林の散策やキノコ狩り、芋煮会や餅つき、マタギの夜なべ談義等の体験ツアーも実施された。また里山の休耕地を活用したわらび栽培は町の特

・登山ガイド（チームらっせるまん）http://www2.jan.ne.jp/~tabi-pro/gaku/
・「白い森の白い炭」生産組合（柳沢）☎090-9133-4486

▲泡の湯温泉「三好荘」の季節の山菜料理と泡（炭酸ガス）の風呂

▲旅館を背景に、舟山鐵四郎さんと孫の隆さん

産品になっており、町内には観光わらび園が10個所あり、山菜やキノコ、加工品を売る店も通年開店して賑わっている。

マタギの里は温泉と山菜の宝庫

町の西部・小玉川地区は約40戸あり、うち20戸が古くから続くマタギの家系。天然温泉も湧くため国民宿舎や民宿があり、その奥に温身平のブナ原生林がある。

同地区の奥まった場所、小玉川の清流に建つ泡の湯温泉「三好荘」に投宿し、この温泉を発展させ地域の活性化に繋げてきた舟山鐵四郎さん（82）に話を伺った。

泡の湯は岩から染み出る炭酸ガスを源泉とする湯で、35～36度。秘境の湯ファンに知られ、家族皆で接客に当たる家庭的雰囲気でも人気がある。

いまは楽隠居の鐵四郎さんだが、道のりは厳しかった。

「戦後間もなくここから300mほど上流で、岩から噴き出す温泉を父と叔父が発見、私が開発と温泉宿をやることになった。山の中で妻と子どもだけのランプ生活をしながら、泥んこになって建築資材を運び上げたもんです。昭和27年に営林署が林道を開いたため自動車で客が来るようになり、41年に現在の地に広い旅館を建築したんですが、移ってきた2ヵ月後の8月に大洪水に襲われてしまった。この羽越水害はかつてない水害で道路も橋も鉄道も寸断し、村は各地で孤立したね」

いま舟山さんが一番嬉しいのは、孫の隆さん（29）が山形市で調理人の修業をして帰宅し温泉経営や料理に精出していること。狩猟免許も取得し、マタギとしても地域で活動していくことになった。

「マタギ20名の中では隆が一番若い。マタギが猟をする時は一人で入山することは禁止し5～10人で山にはいる。熊はもう里あたりまで来ているけれど、私たちは危険だからという名目で余計に捕殺したりはしません。子熊と雌は殺してはいけないことになっています。そういう掟を無視した猟友会員が都市部で増えて、熊が大量に射殺されている、困ったことです」と鐵四郎さんは言う。

旅館にはマタギ資料コーナーがあり、剥製にした熊やマタギの恰好と用具、歴史を示す貴重な資料が展示してあった。さらに、舟山さんは近くの森にシャクナゲを3000本植えて公園を作り、地域の人に解放している。

早朝から山へキノコ狩りに行っていた隆さんが8時頃帰ってきた。天然のなめこ、しめじ、くりたけ等が沢山採れた様子。

「山菜の場合はお客さんを山へ案内しますが、キノコは駄目。素人は菌ごと根こそぎ取るので翌年生えなくなることが多いんです。ここは水もお米も最高においしいと3年間の修業で実感しました。山の恵みに新しい感覚を加えた料理を出すよう勉強中です」と言っていた。

「小国町交流まちづくり研究会」の会長をしている本間信義さんは小玉川地区の入口近くで民宿「越後屋」を営む傍ら、写真を撮ったり絵や詩、書を書く趣味人。本も発行し、プロも顔負けの写真とイラストで飯豊連峰や地域の魅力を紹介している。宿には本間さんと語り山へガイドしてもらうのを楽しみに来るリピーターが多く、特にアマチュアカメラマンに人気の宿とか。昼食に山菜そばを食べたが、手打ち蕎麦に香りいっぱいの山ウドが実に美味しかった。店はUターンしてきた長男の義人さん（30）が手伝い、彼もマタギの資格を取得している。

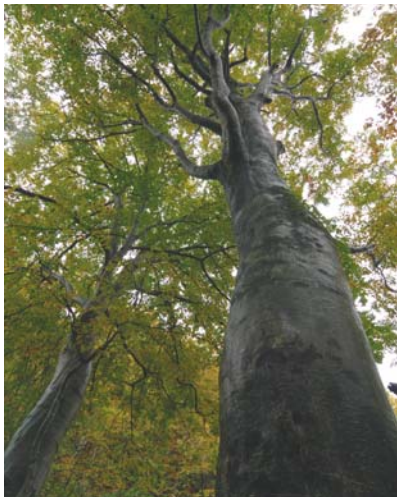
「交流まちづくり研究会」について本間さんは、「今まで町が広いので別の地区のことはあまり知らず、横のつながりがなかった。いま各地区のリーダーたちに呼びかけて、交流事業や町おこしについて情報交換したり勉強会を行っています」と言う。

会員は63名、講演会を開催したり先進地視察等を行っている。

冬は雪のために観光客は減るが、越後屋では庭に10mもある雪の巨大なかまくらを作り、中でCDを鑑賞する音楽会を開催している。白い雪の中で聞くビートの効いた音楽は格別と、若者が多数来るようになった。

白い森の国・小国町にふさわしい一大イベントになるのではないかと期待できそうだ。

文／浅井登美子　写真／小林恵



民宿「越後屋」店主の本間信義さん。出版した話題の写真集『大自然の神の魂』を手に

・小国町役場総務企画課☎0238-62-2111
・泡の湯温泉「三好荘」☎0238-64-2220
・民宿「越後屋」☎0238-64-2430

南アルプスの山里で木工・雑穀栽培（長野県伊那市長谷）

自宅前で、吉田さん夫妻

新聞記者を辞めて木工職人に 吉田さん夫妻のもう一つの仕事

伊那市長谷は、赤石山脈山麓、三峰川沿いに広がる村で一昨年伊那市に合併した。伊那市が天竜川両岸と西部中央アルプス沿いに開けた町であるのに対して、長谷は東部南アルプス山麓にあり、そのあいだに城下町・旧高遠町がある。今は高遠から長谷へ抜けるトンネルも出来、伊那市まで30～40分の距離だ。

長谷は、まだ田舎暮らしが盛んではない20年程前に「奇人変人課」を設けて田舎暮らし希望者を積極的に受入れてきた村でもある。常に20組前後のIターン者がいたが、村で生活していくのは大変で、多くの人が出ていき、また入ってきた。そんな中で、都市からの住民を受け入れる気質は、少しずつ定着してきている。

長谷の新中心部・非持地区の「道の駅」で『野のもの』というレストランを経営しているのが吉田洋介さん（39）、由季子さん（39）夫妻。6年前の2000年に長谷に移住してきた。

山間部で昔から生産してきた雑穀（ミレット）に関心の高かった吉田さんは、レストラン『野のもの』でアワやキビ、高遠で採れるアマランサス、それに季節の山菜や地元野菜を活用したパスタやカレーライスを提供している。老人には懐かしく若い人にはヘルシーなメニューとして人気を呼んでいる。

洋介さんの本職は木工家で、店内のテーブルや椅子、カウンター等はすべて洋介さんの手づくり木工品。さくら、ケヤキ、くるみ等の材を使って丁寧に作った温かみのある調度品で、ここに座って紅葉する山々を眺めながら食事や珈琲に味わうひとときは極上だ。

吉田さん夫妻がレストランを始めたのは昨年3月。「まだ慣れないところもあるんですが、お客さまも定着してきて、特に土日は地域の人が大勢きてくれます」と洋介さん。

実は「道の駅」は10年前に開業、地域の農産物や加工品を販売し、観光客の交流休憩所としてオープンしたが、食事処がなかった。そのため村がレストランスペースとして施設の一部を増改築し、住民に運営を呼びかけた。しかし名乗りでる人がなく、伝統文化や伝統食品の継承を行う地元のNPO法人「南アルプス食と暮らしの研究会」の理事（当時）をしていた吉田さんに話が来た。

「話を受けたのは、単純に面白いと感じたからです」と吉田さんは言う。

吉田さんは数ヵ所に畑を借りてアワやキビ等の雑穀を栽培したり、ニホンミツバチを飼育している。

「僕は大学が農学部だったので、雑穀にすぐ興味が湧いて来ました。赤石山脈の山麓では昔からアワなどが大事な食糧だった。これを復活して現代の食事に活かしたいと思ってきました」

奈良県の出身。神戸大学農学部を卒業して共同通信社の一般記者になったが、地方に関心のある本人の希望で初任地は盛岡支局へ。由季子さんは埼玉県浦和市の出身。早稲田大学社会学部を卒業して同じく共同通信社に入社、二人の交際がはじまった。仲間が羨望する職場だったが、「もともとサラリーマン的生活より、身体を動かす仕事がしたい」と思

上から、道の駅にあるレストラン「野のもの」（左）、帰宅した那緒ちゃんとレストランで、ミレット・パスタとそれを運ぶ由美子さん

・家具工房吉田屋 http://www1.inacatv.ne.jp/~yoshida-ya/

▶木工作業をする吉田さん(右)と収穫したアワ

◀三峰川の段丘に広がる長谷の集落

っていた洋介さんは30歳で退社、田舎暮らしを始める準備として、実家のある奈良県の職業訓練学校で一年間木工を学んだ。卒業後長野県の塩尻市に移住してきて半年間木工所で働いて工芸の腕を磨いた後、旧長谷村に念願の田舎暮らしを実現させた。

「嫁さん(由季子さん)は、新聞記者の仕事を辞めたくないといつも言っていましたが、結局ついてきてくれました」

長谷に来る前に誕生した一人娘の那緒ちゃんはいま小学校2年生。学校から帰ると夫妻のいるレストランにまず顔を出し、空いているテーブルで宿題や読書を楽しんでいる。

我々が訪ねた日は、風邪で熱もある様子で帰宅、心配した由季子さんが医者へ連れていったが、間もなく元気に帰ってきて、おやつのケーキを美味しそうに食べはじめた。母親似の華奢な都会っ子に見えるが「田舎育ちのせいか丈夫で逞しいんです」と母親はほっとしながら笑う。学校まで約2・5キロの道のりを毎日40分かけて通学している。

レストラン経営のために猛勉強をした由美子さんは、いまではミレット・レストランの名コック。毎朝7時半に店をオープンして、一度帰宅して那緒ちゃんと朝食を取って学校へ送りだすという忙しい生活をこなしている。店はパートの人を1、2名雇って運営、午後は洋介さんと適宜交替する。のんびりした夢の田舎暮らしは当分はお預けになりそうだ。

ミレット・パスタをいただいたが、アマランサスのぷちぷちしたタラコのような感触と香ばしさが口の中に広がり、癖になりそうだ。

家は、レストランからクルマで約5分のところの高台にある。モダンな二階建て木造住宅で、洋介さんが設計施工した。長谷に移住して来た後間借りしながら早速この高台に土地を取得、一年間かけて、一人の大工さんと洋介さんで作りあげたという木の香あふれる家で、隣には広い木工房も建設されている。まだ未完成という工房だが、家具制作のための大型機器類が配置され、丸太の木々が制作を待っている。「レストランをやるようになって肝心の木工品作りがゆっくり出来ないのが残念です」と言いながら、手は制作中の木工作業に向かいだした。

工房の一隅には、今年の秋に収穫したばかりアワやキビ等の紙袋が並んでいる。今年の出来は良好だったというアワの穂がたわわに実をつけて輝いている。このあと実は穂から取り出し、何度も天日干しして保存する。

裏手は紅葉が美しいカラマツやスギ、広葉樹の雑木林、目の前は田んぼと村の市街地、その先には三峰川河川を望む景勝地で、最高のロケーションである。忙しい二人だが、雨模様の合間に顔を覗かせた日ざしの下で急ぎ撮影させてもらった。

雑穀を活かした山里の食文化と木工品制作の取り組み、そして地域や都市の人々と語り合うための交流レストランに、地域の新しい姿が提案されているように思える。吉田さんという魅力ある人材を見守っていって欲しいと願わずにはいられない。

吉田さん制作のテーブル・椅子を配した「野のもの」

週末通いから「終いの住処」へ 指田さん家族

指田志恵子さん(66)と長男将太さん(31)は、三峰川から東段丘に広がる中尾地区の大きな農家に住んでいる。広い居間と囲炉裏、黒光りする大黒柱や板戸等、古民家の良さを生かしながら改装、新たに書斎、オーディオルーム、使い勝手のいい台所等を設けた見事な家で、8つの居間と土間、台所、収納部屋がある。長年東京で働いてきたご主人の恒夫さん(61)が預貯金の大半を注ぎ込んで仕上げた住宅で、親しい人たちがいつでも集えるよう「まんま畑の家」と名付けられている。

指田さんが旧長谷村中尾に民家と畑を借りて子どもやご主人と週末ごとに来るようにな

指田志恵子さんとご主人の恒夫さん

右／将太さんの誕生日に手料理を持ってきてくれた宮下さん家族と
左／古い民家を手入れ、改装した指田家の居間。明かりの演出が見事

ってからもう20年余経つ。ノンフィクション作家の指田志恵子さんは、過疎の山村へ足繁く通って取材執筆し、『過疎を逆手に取る』『生命満つる里・沢内村』等の著書がある。地域問題のバイブルともいわれるこれらの本を読んで感動し、指田さんに「村へ来てくれ」と言ってきたのが長谷村のMさんだった。

中尾の空家になっていた民家と畑を借りてハーブ等の栽培をはじめる一方、住民に自分たちの住む村の素晴らしさを見直して欲しいと、村の協力を得て、親交のある農民作家の山下惣一氏や沢内村の太田村長を招いて文化講演会を開催したり、東京からミュージシャンを呼んで音楽会等を企画した。執筆活動も長谷村を拠点に行ってきた。

そして6年前、農家の人から家屋敷を手放したいという相談を受け、土地と家を購入、半年かけて室内を大改装した。永住を決めて住民票を長谷に移したのは志恵子さんと長男の将太さん。都で住宅関係の仕事をしていたご主人の恒夫さんは、定年後も所沢市の自宅で85歳の母親と暮らし、月1～2回長谷へ来ている。

「僕は東京の下町育ちなので、田舎は好きだけれど、その土地の共同体のなかで住民として暮らしていく自信がない。第三者的立場で家族や地域の人の役にたちたい」と語る。

「父親はいつも美味しい食材や都市の情報を届けてくれます」と恒夫さんの来日を待つ将太さんは、30種のスパイスを言い当てるほどの食通で、我々にもプロ顔負けの美味な夕食を用意してくれていた。昨年秋までダム関係の会社で広報の仕事をしていたが、ダム工事縮小に伴い失業した。今年は吉田さんの「野のもの」で働くとともに、介護福祉士の資格を取りたいと言う。幼い頃から長谷にきていたので、地区の人にも可愛がられ、住民になってからは長谷消防団の一員として、最年少で地域の防災安全活動に当たっている。取材に訪ねた日は将太さん31歳の誕生日で、仲間の夫妻が手づくりのナンとカレー料理を持ってお祝にかけつけてくれた。そのあと、明日の文化祭で演奏する太鼓の練習のために公民館へ出かけていったが、そこでも仲間たちが誕生祝いをしてくれたそうで、10時すぎに楽しそうに帰ってきた。

一方、高齢者問題にも関心の高い志恵子さんは、現在週2日ユニット方式の新型特別養護老人ホーム「サンハート美和」でお年寄りの介護に当たっている。150人が入所、志恵子さんの経験豊かで人の心に寄り添うケアは入所者に待ち望まれ、ホームの人気者になっていることが伺えた。

そんな志恵子さんと将太さんだが、長谷の住民になったとたん、地域の一部の人達の態度が一変した。道で出会っても知らんふりをするのだ。以前から、文化講演会等への参加を呼びかけると、「出たいわ」という女性に対して「出たらあんたとは付き合わんからね」という人がいることは知っていた。

指田さんは「ひとり一人は自立して魅力的だが、まちづくりの会には参加しないし、しても発言しない女性が多い」と感じていた。村へ来て、黙々と休耕田を耕したり森林作業をしてくれる移住者は歓迎するが、地域のことや行政に口出しする人はお断りという風土が日本の田舎にはまだ確実にある。それは住民だけの問題ではなく、村主催のある会合に参加した時、役場の課長が「今日は一言も発言せなんで偉かった」と言った発言でもうなずける。これが村を村たらしめている根源、「せっかく伊那市に合併したのに、市主催の行事に長谷の女性達は殆ど参加していない。地域中心ではなく広域的見地でものを見たり行動するいい機会なのに」

落ち込む日が多くなった。しかし移住して5年たったある日、静かな覚悟に至った。「ここは私の終いの住処、ここで息を引き取るのだと思ったんです。そしたら他人のことが気にならなくなってきた。道で人に会えば必ず挨拶をしますが、相手がどう返すかは気にしない。次第に”おら達と同じだ”と思われるようになってきました」と志恵子さんはしみじみと語る。

翌日の文化祭では、若手青年の中核として大太鼓を打鳴らす将太さんの爽快な姿と、客席で静かに見守る両親のまなざしがあった。

長谷は3月で伊那市との合併一年を迎える。それを機にこのままではいけない、自分達の手で地区をよくしようと「長谷を賑やかにする会」が生まれ、さまざまな活動が始まった。道の駅「南アルプスむら」の中に住民主体で文化芸術拠点をつくる動きも出てきた。その企画メンバーとして多忙な日々の中で、「住民の底力を感じるようになった」と志恵子さんは嬉しい悲鳴を上げている。

文／浅井登美子
写真／満田美樹

文化祭で「長谷太鼓」を演ずるメンバーたち。前列右が将太さん

もうすっかり"しまないちゃー"ヤンバルクイナの保護活動も

（沖縄県国頭（くにがみそん）村）

ダイビングを指導する服部さん

やんばるの森をガイドしてくれる服部美冬さん。アカギの巨木の前で

三方はエメラルド・ビーチ、村の中央部は原生林が生い茂り、ヤンバルクイナ、ノグチゲラ等の貴重な動物が生息しているやんばる（山原）の森。この自然と人懐っこいおばあたちに魅せられて何度か訪れる内に、ついに移住して来た人たちは、穏やかな時間と熱い沖縄の空気をいっぱい浴びて魅力的に輝き、もうすっかり「しまないちゃー」（島人のような内地人）。地区の人々からも頼られる存在だ。

やんばるの自然に魅せられて20年

国頭村は沖縄本島の最北端に位置し、東は大平洋、西は東シナ海、村の内陸部は島最大の山林原野でイタジイ等の原生林が生い茂り、ノグチゲラ、ヤンバルクイナ、ヤンバルテナガコガネ等の希少生物（国の天然記念物）の生息地になっている。

この自然に魅せられて服部吉伸さん（53）美冬さん（52）夫妻が、国頭村にダイビングややんばるの森歩きで通って来るようになってから20年近くになる。

「年に3～4回来ていて、ここがとても好きでした。移住してきたのは6年前。村が宇良に土地を分譲したので土地を買い家を建ててしまいました。来たかったのは私で、主人は東京に残って働くという話もあったんですが、連れてきてしまった。家族の一員である犬と猫も一緒に」と美冬さんが言い、隣で伸吉さんが微笑んでいる。

吉伸さんは八王子市出身。20年以上会計事務所に勤務、美冬さんは専業主婦。といっても海や山が好きで環境にも関心の高い行動派だった。二人は結婚して八王子市に住んでいたが、多摩地方の開発は凄まじくどんどん変貌していく。そんな二人にとって国頭村の自然はとても貴重であった。しかし国頭村でも同様に年々開発が進みはじめ、青い海は雨の度に赤土で染まる。開発を目にした二人は、自分らで何かできることがあるのではないかと移住を決意した。

移住後は長年のボランティア経験を生かしてネイチャーガイドショップ「きじむなあ」を立ち上げたが、吉伸さんは「道の駅」から会計業務を頼まれて3年間程運営に携わる。その間、ツーリズム協会の運営やヤンバルクイナ保護の草の根活動にも携わって来た。

そんな二人の生活を変えたのが「共同店」の経営だった。自宅が店から徒歩5分ほどの場所にあるので、交代して家のこともできるが、二人でダイビングを楽しむような時間は取れない。我々が取材にお伺いした日も、客足の減った夜8時まで店を開け、時々来店する客ににこやかに応対していた。

地域住民の生活の核「共同店」

沖縄には本島北部や離島の集落ごとに日用雑貨品や食品を売る共同店と言われる店があり、百年の歴史を持つ店もある。明治39年に資産家が私財を投じて開設した国頭村奥共同店が1号で、その後住民たちが資金を出し合って開設し自主的に運営していく店が各地に出来た。しかし100店以上あった店も現在75店。大型量販店が出来て利用者が減ったり、集落人口の激減で運営が困難になったためである。国頭村には15店が現存しており、その

宇良共同店と、店番をする服部夫妻

沖縄 やんばるの森に住む

美野定雄さんの和紙工房

一つ、村の中央部西海岸にある宇良共同店の運営を担っているのが服部さん夫妻である。「この集落も若者が出ていって高齢化が進んでいます。皆が一度は共同店の運営にタッチしてきたけれど、もう仕入れしたり朝から夜まで店に立つということは難しくなった。誰もやる人がいなければ閉店しかない。それは困るというおばあたちの必死の頼みで、私たちが2年間の約束で引き受けたんです」

売店に併設してネイチャーショップを設け、その家賃1万円を集落の収入として計上している。しかし売店の利益を手伝いの3人を含めて支払い、2階にある公民館の光熱費も負担すると、小遣い程度の金額しか残らない。「でも、共同店はヤンバルの貴重な文化の一つです。クルマの運転ができないお年寄りの買物の場であり、情報交換や交流する"ゆんたく"の場なんです」と吉伸さんは言う。隣には小さな美容院もあり「皆月一度は利用しており、沖縄のおばあはとてもお洒落よ」と美冬さん。

ネイチャーショップでは美冬さんがデザインしたオリジナルTシャツやストラップを販売し、ヤンバルクイナ等の保護活動資金に当てている。ダイビング用のジャケット等の用具の他、ハブにかまれた時の吸い出し用具等もあり、旅行者が訪れる機会が増えた。

朝は7時に開店、作り立ての弁当やパン類が配達され、それらを買いにトラックの運転手らがやってくる。店は二人の努力で、家庭日用品から子ども向けの菓子まで何でも揃っていて価格も従来より安くした。午後は次々とおばあたちがやってきて、お喋りを楽しんで帰っていった。

アート感覚いっぱいの暮らし

夜、服部さんの家にお邪魔した。大工のアドバイスでコンクリート2階建だが、家の中はお洒落な木造作りで、広い居間は美冬さんが浜辺の石や貝を使って創作した照明器具や人形、アクセサリー等で溢れている。テーブルに寝そべっているのは猫のレオ、16歳というが、若々しくて甘えん坊だ。

「静岡市生まれ、海が好きなのは父の影響ですね。小学生の頃夏休みに海岸で貝を拾って母に手伝ってもらって標本を作りました」

子どもの作品とは思えない立派な標本はいまも手許にあり、美冬さんの創作活動の原点になっているようだ。イラストも描き、化粧品のパンフレット等に採用されている。

いまは店主として多忙な吉伸さんだが、東京からコンピュータで送られてくる会計の仕事もしている。年一度東京へ戻るのが楽しみだと言い、「来年は冬のニセコへスキーに行く」と決意を語った。

夏はダイビングやシュノーケリングやトレッキング等のガイドで多忙だが、年間では減る傾向にあるという。それは航空会社や旅行会社が沖縄ツアーを指定のビーチホテルに宿泊させて安い価格で行うためで、旅行客が地区の交流活動に参加したり住民と交流する機会が少なくなっている。我々の宿泊したホテルも同様で、岐阜からきた高校生グループはホテル内で指定のメニューをこなして帰っていった。外には魅力ある宿やレストランがあり、沖縄方言も楽しめるのに残念だ。

いのちを育む精霊の森

翌朝美冬さんが近くの森へ案内してくれた。人家のある裏手の坂道を登ると、突然亜熱帯特有の植物群が鬱蒼と茂る広場に出た。広場には祭りを司る祭場があり、その先に胸高直径180㎝という巨大なアカギが天高く枝を伸ばしている。フクギ、ホルトノキ、タブノキ等の高い木が多く、その下に遊歩道が作られ、手入れも行き届いている。ここは先祖や神々が住む場所で、地区の住民が聖域として大切に保護してきたからだと言う。12月だが気温は22～23度で湿度も高い。生い茂る木々の間を野鳥がさえずって飛び交い、美しい赤色をしたアカヒゲ（国指定天然記念物）も間近に見ることができた。

「いま一番心配なのはヤンバルクイナの大敵のマングースがついに大宜味村を越えて国頭村に入ってきたらしいこと」と美冬さんは言う。

森を下ったところに服部さんと親交のある和紙工芸家・美野定雄さんの工房があるというので見学させてもらった。河原に自生しているというパピルスや琉球コウゾを漉いて重厚で個性的な和紙を作っている。屏風、ふすま、照明用として特注を受けたものだけを制作しており、書や絵を描いた作品もある。

「昔、那覇の広告代理店で人を募集していたので応募して、東京から逃げてきたのさ、も

手づくりの装飾品が楽しい服部さんの自宅居間（上）とヤンバルクイナのTシャツ等を手に服部夫妻。ネイチャーショップで

・海遊び・森遊び「きじむなあ」http://www.k-trinity.co.jp/kijimunaa/
・NPO国頭ツーリズム協会（KUTA）http://kuta-okinawa.org/

左／ヤンバルクイナ観察小屋　中／くいなパークゴルフ場　右／やんばるの森を横断する道路

う30年も前のことだね。那覇から次はここへ来て和紙を始めた。かみさんは那覇で美容院をしているから髪結いの亭主と言うところですね」と笑いながら語る。

色や風合いの異なる和紙に灯がつくと工房には華やいだ不思議な空間が生まれる。その先には、古民家には必ずあった囲炉裏の居間がある。ここに服部さん夫妻も時々来ては、酒を飲みながら語り合うそうで、移住者だけでたまに心おきなく喋る、それがストレス解消にもなっていると美冬さんは言っていた。

やんばるの森を経て安田（あだ）集落へ

国頭村の西海岸と東海岸を結ぶ県道は、やんばるの森を横断している。400m級の山岳が連なる豊かな森林地帯で希少な野生生物が生棲しており天然保護区域。各所にヤンバルクイナの保護標識の看板が立ち、速度を30キロに制限している。しかしよく整備された道なのでついスピードを上げてしまいそうで交通事故で死傷するヤンバルクイナが後を絶たないという。

森を抜けると眼下に緑の芝生が広がる「くいなパークゴルフ場」があり、その先に安田地区の集落、海も見えてきた。広大な緑地では数人がパークゴルフを楽しんでいる。毎年冬になると北海道から2～3ヵ月の長期滞在で出かけてくるグループもあるとのことで、男性客は「ここは若葉青葉の五月頃の爽やかさで、来るだけで命の洗濯ができます」と言う。

入口近くには、村が昨年設置した「ヤンバルクイナ観察小屋」がある。周囲約2キロをフェンスで囲んで、他所からの野生動物の侵入を防いでいる。森の中の水のある場所など3カ所にカメラを設置して撮影し、その映像が小屋のモニターに映し出されるというもので、やんばるの森の生物たちの生態を観察することが出来る。「問題のマングースが侵入していないかをチェックする目的もあります。マングースは侵入していないと信じていますが、それでも画像を見る時は緊張します」と管理人の島袋武志さんは語っていた。

窓から森を眺めたり森からの映像を見て一日過ごしたい場所だ。

ヤンバルクイナを木版画に

東海岸にある安田集落に、昨年の3月に移住してきたという菊田一朗さんを訪ねた。

安田地区の入口で菊田一朗さん（45）が待っていてくれた。シャツとジーパンがよく似合う青年で、版画家である。早速作品作りをする工房へ案内してもらった。工房は元公民館だったそうで、小さいホールと板の間の部屋があり、創作活動やミニ展示場として使用するのにぴったり。

「僕は描く前に必ず取材します。国頭村にもヤンバルクイナを観察するために何度か通って来ていて、昨年（18年）3月に家族と移住して来ました。来たばかりなのに、すっかり住民になっていますよ」と菊田さんは言う。

「絵を通じてヤンバルクイナ等の貴重な生き物を守る大切さをわかりやすく伝えたい」と菊田さんはNPO法人「どうぶつたちの病院」と協力して本島北部に生息する希少な生物を豊富な絵で紹介する『やんばるいきものノート』を作製中だ。制作のきっかけは、生息調査で来た時、地域の殆どの子供が生き物について知らないことにショックを受けたためだった。ヤンバルクイナ、ノグチゲラ等50点を生き生き描いた画集で、国頭、東、大宜味村の小学生には無償で配付するという。

ヤンバルクイナは国頭村やんばるの森だけに生息する鳥で、太くて赤いくちばしと胸に白い線がある若鶏位の大きさで、飛べない鳥。せかせかと動きまわって落葉や土の中にいる昆虫やカタツムリ、ミミズなどを採って食べる。飛べないため、他の動物に狙われたり、道路を横断中にクルマに跳ねられやすい。いま環境省が最も絶滅の怖れがある生物の一つに指定している希少種だ。

菊田さんの木版画には、地面を忙しく歩く愛嬌ものヤンバルクイナの特徴が力強くシンプルに表現されている。クイナを取巻く植物や花等、やんばるの森の雰囲気も墨一色の中に見事に描かれており、取材（観察）することの大切さを実感した。ヤンバルクイナの仕草を沢山描いて図案風にまとめた作品もあり、彼のクイナへの深い愛情が感じられる。

菊田さんは福島市出身で3人の女の子のお父さん。小学校1年生の女の子（双子）は、来てすぐ4月に安田小学校に入学した。

「全校児童が13人なので、少なくて大丈夫か

ヤンバルクイナの木版画を手に菊田一朗さん

・国頭村企画財政課☎0980-41-2101
・ヤンバルクイナ観察小屋☎0980-41-7788
・ヤンバルクイナ救命救急センター☎0980-50-3300

ヤンバルクイナ救命救急センターと内部。リハビリ中のクイナ（左）中／飼育等の世話をする菊田さん

と心配したんですが、それは全くなかった。13人全員が友だちで、地域の大きな子どもに混じって放課後もよく遊んでいます。区長やおばあたちから、今年はあきらめていたのに入学式が出来たととても喜ばれました。」

奥さんもここが気に入り、沖縄の芸能を勉強中という。

家は空家を借りている。

「画材や額縁は東京から取り寄せる等の不便はありますが、ここの空気がとてもいい。ヤンバルクイナとも毎日会えますし――」

ヤンバルクイナの保護活動

という菊田さんのもう一つの仕事が「ヤンバルクイナ救命救急センター」での飼育係。工房の前には木々が茂る広場があり、その脇に傷ついたり衰弱したりして保護された9羽のクイナを収容するリハビリ施設がある。そこでクイナの観察と朝と夕方の餌やりを菊田さんが担当している。「安田小の子供たちもバッタやヤモリ、昆虫などを採って来てくれますが、普段は上野動物園がトキ用に開発したフードとドッグフードを与えています」

ヤンバルクイナはとても臆病なので自然の森の雰囲気を作り、4つのゲージに分けて育てている。水浴びが好きなので水をたっぷり与えることも大切だと菊田さんは言う。カラスに狙われた巣の卵を保護し人工孵化させた個体もいる。

この施設はNPO法人「動物たちの病院」にもなっており、動物が運び込まれた時は獣医師がすぐ駆け付けるようになっている。

「地域には、まだやんばるの森の生物の希少性や危機的状況にあることを理解していない人たちもいる。沖縄ではヘビをみるとハブだといって殺してしまう人も結構います。ヘビも10数種類いて危険なヘビは一部だけなんです。発見当時1800羽いたクイナが今では720羽になってしまった。希少な生物は感染症を防ぐため、数カ所の動物園で育てる話がありますが、ヤンバルクイナにとっては、この湿気が高く（80％）、花や実が豊富で生き物が多様に生息するやんばるの森こそ理想郷だと思いますので、ここで頑張ってほしい」と菊田さんはきっぱり言った。

芸術家たちが暮らす「ぶなかやの里」

（沖縄県大宜味村（おおぎみそん））

大宜味村は総面積63・12㎢、人口3500人の比較的小さな村だが、長寿日本一の村、芭蕉布の里、ぶなかやの里としてアピールしている。芭蕉布は沖縄の伝統工芸品として高い評価を受け、いまも女性たちがその技を継承している。そして国道を一歩入ると村の伝説に登場する森の妖精「ぶなかや」が住んでいそうな深い森があり、そこに移住してきて陶芸をする作家たちがいた。

「使うための工芸品」制作を

村の北部を流れる田嘉里川にそって東にどこまでも行くと田嘉里集落に「手仕事ギャラリーじんじん」という看板が現われ、看板にそって山に入っていくと山上学さん（47）の陶芸工房が現われた。鉄骨の広い工房で、窯と窯入れ前の器、東京の展示会へ出荷する段ボール等が並んで活気に溢れている。

作品が並ぶ展示コーナーへ通された。目の前は小さい川が流れる雑木林、そこにベランダを張り出し木のテーブルや椅子が置かれている。爽やかな風が流れ野鳥の声もする。間もなく奥さんの晶子さんがハーブ茶を入れてきてくれた。山上さん手づくりのお洒落で手に心地いい茶わんが贅沢なティータイムを提供してくれる。「時間を止めて寛ぎたいね」と案内してくれた役場の女性がため息をついた。

沖縄の陶器というからカラフルで釉薬がこってりした作品を連想していたが、山上さんの作品は全くその逆で、黒いマット調を基調にした渋いが大胆なデザインの酒器類、金彩や繊細な絵を加えた皿や鉢。コバルト色が美しい使い勝手のよさそうな皿や鉢等々。粋でモダンで、しかも優しさに溢れている。特に人気の作品は耐熱黒マットの土鍋。鍋料理

作業をする山上学さん

・大宜味村経済課☎0980-44-3232

山上学、晶子さん夫妻と「じんじん」の作品の一部

の他にご飯を焚いたりシチューや蒸し料理にも使えるという鍋で、独特のかたちに金彩や楽しい赤絵の把手を施したもの。同じバリエーションですき焼き鍋等もある。日本各地での展示会の他、インターネットでも販売している。

「まず使いやすいこと、道具や器を介して楽しい時間が生まれてほしいと願っています」と山上さんは言う。

大阪市生まれで、京都工芸試験所や美術学校で陶芸を学んだ後、瀬戸でろくろ、京都で釉薬を修業し、26歳の頃茨城県笠間市で独立した。その後益子に工房を移して屋号「蜜窯」として本格的な工芸家活動が始まる。デパート等で定期的に個展も開催してきたが、3年前にここ大宜味村に移住してきた。

「以前から沖縄の文化や風土が好きで、二人で本州の産地から離れて南の方へ行きたいと話していました。ここは神話の里で山の集落、近くに人家もないので工房で窯を焚いたりマイペースで仕事するには最適の場所です。大こうもりが飛び、森にはフクロウも鳴いています。虫が多いので蚊取り線香は欠かせませんが、蛍が舞う大自然のど真ん中です。ここの土を使って新しい作品作りにも挑戦したいと思っていますが、いまは内地の土を業者から取り寄せています」

晶子さん（36）は東京出身。「栃木県の山里では野菜作りもしていたので、山の暮らしは平気です。」と言う。男の子（小学生）二人のお母さん。

天然酵母パンを焼いて朝市で販売する等の活動もしている。

山のてっぺんで炎と向き合う

沖縄では陶器を「やちむん」（焼き物）という。伝統的な陶器は大別して2種類あり、ひとつは水瓶、酒瓶、植木鉢、獅子置物等、無釉で焼き締めたもので、南蛮焼きといわれる陶器。一つは釉薬を施し食器などに広くつかわれる上焼といわれる一般的な陶器。

島袋文正さん（55）はこの伝統ある南蛮焼き（荒焼）に生活用陶器という新たな可能性を求めて制作を続けている。

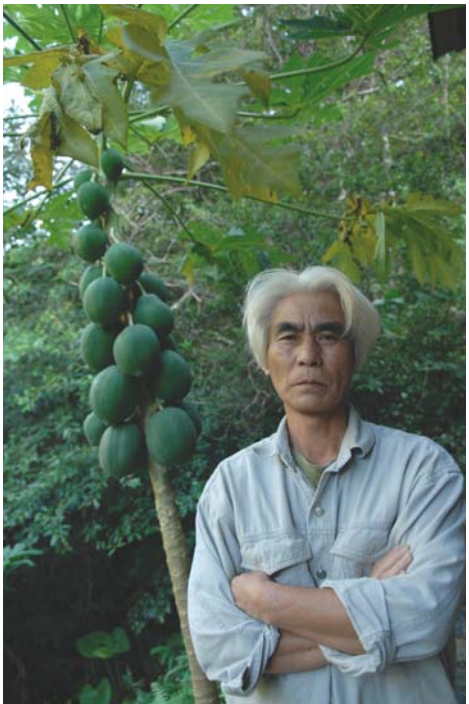
村南部の押川地区の山のてっぺんに島袋文正さんの「登土南蛮（ふんどなんばん）」という工房がある。登土とは、ものが集まるという意味だそうで、陶器は土と木と炎、人の英知を結集したものという意味なのだろう。家も工房もすべて手づくりしたようで、様々な草花やパパイヤの巨木、置石等が見事に配置された家だ。玄関脇の土間には囲炉裏があり、薪が燃えあがるのを見ながら哲学する島袋さんの日々が伺える。

島袋さんの陶芸歴は30年、県内石川市（現うるま市）で陶芸をしていたが、15年程まえに大宜味村に移住してきた。その前は本土で陶芸の修行をしていたという。

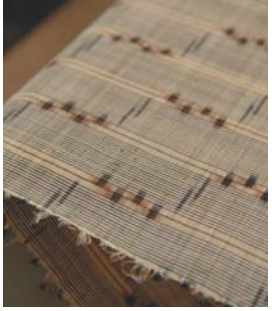
作品は素焼きのものを木で焼き上げるという原点的な手法で、大小3基の窯が家の脇の林の中に設置されている。何日間も薪を窯に入れ続け2000度までにすることもあるため、このような人気のない山林が必要だった。

「木によって全く異なった作品が出来、窯、炎の状態、灰のかかわり方等によっても違ってきます。その未知数のところが面白いんです」

大きな瓶、鉢、徳利やおちょこ、皿や珈琲カップまで、すべてをこの手法で焼き上げている。一見土色に見えるが、炎を連想する明るい紅色から黒に近い深い色までさまざまで、手にすると土や木に触れたような温かさ、素朴さがある。



島袋文正さんと作品。無釉で数日間焼くための登り窯（下）



◀半年の作業を経て完成した喜如嘉芭蕉布と芭蕉布会館

▶島袋さんの工房がある山の上の家

現在那覇市などで年2回個展を開く他は、業者からの注文で販売しているが、「業者の中には、大きいから高い、小さいから安いだろうと言う人もいて、作品として理解してもらうのが難しく、個展ではポピュラーな小皿や湯のみ等を沢山用意して欲しいという注文もある。子供たちも独立したので、最近は自分で納得できる仕事だけをやりたいと思っています」と語る。

3つの窯を見せてもらった。斜面の一番上に設置した窯は登り窯で、使用しない時はきれいに磨きあげお札もかけてある。神宿る神聖な場所であることが伺える。

そのためにも地域の自然環境を悪化してはならないと、草刈りや河川の清掃等、共同作業には欠かさず参加している。裏山は自分の土地ではないが、豪雨などで土砂が流失しないよう、間伐や植栽に出かけて手入れしている。山の中で悠々自適の仙人暮らしをすることは大変なのだということを垣間見た気がした。

芭蕉布を伝承する女性たち

大宜味村の「喜如嘉の芭蕉布」は沖縄に伝わる古い歴史を持つ織物の一つで、国指定重要文化財、伝統的工芸品に指定され、喜如嘉周辺の村の女性たちによって伝承され続けている。糸芭蕉で織り上げた着物は、風通しがよくべとつかずさらりとした感触で、南国沖縄の風土に最適。昔は各家庭で芭蕉を育てて織物にしていたが、戦後は木綿や化学繊維等の普及で手間のかかる芭蕉布を織る人が激減した。そんな中でこの伝統ある織物を受け継ぎ、若い人たちに継承して来たのが平良敏子さんで、昭和47年に県の無形文化財に個人指定され、49年には「喜如嘉の芭蕉保存会」が国の重要無形文化財に指定された。それを機に協同組合が設立され、2年後には芭蕉布会館がオープンした。

芭蕉布の生産工程は極めて複雑で、２００本の芭蕉から1反分の糸しか取れない。しかも芭蕉は糸を採集するまでに3年かかる。主な工程は、芭蕉から繊維を取り出す、1・5mしかないのでしっかり結びあわせて一本の糸にする、反物の長さに合わせて整経して、天然染料で染色する。これらの手間のかかる工程を経て、はじめて高機（たかばた）で織りに入る。しかも織り上げた芭蕉布は木灰汁で炊いて水洗いし、さらに米粉とお粥を加えて発酵させたユナジでもみあげる。こうすることで芭蕉布特有のしなやかさと色が出てくる。芭蕉を切り出してから5～6ヵ月経てやっと日の目をみるのだという。

土曜日の朝、芭蕉布会館へ行くと、2階の工房では休日を返上して数人の女性が働き、敏子先生は芭蕉から取り出した繊維を一つ一つ丁寧に点検していた。「採れた場所により色も風合いも微妙に異なるんですよ」という。続いて手袋をはめ染色の準備にとりかかった。80代というがとても若くて穏やかな方である。奥の畳部屋では2人の女性が、繋ぎ合わせて長くした糸を撚る作業をしている。カーテンをして太陽の日ざしを遮った窓辺では織機に座って芭蕉布をひたすら織る女性もいる。

代表理事を務める平良美恵子さんは、福井県の出身だが、芭蕉布の魅力と伝承していくことの大切さを知り、義母から徹底的に指導を受けて、いまそれを若い女性や地域の人に伝えると共に、展示や販売にも意欲的に取り組んでいる。

昭和50年から後継者育成事業もはじまった。ここで修業して独立、芭蕉布織りを始めた人もいるが、テレビや本を見て気軽に来た女性の多くは、繊細で忍耐のいる作業や夏の暑さに挫折してしまう。しかしその厳しさを乗り越えてきた女性たちは自信に満ち、家庭や育児と両立しながら生きがいのある仕事として続けていきたいと語っていた。

国指定の重要文化財というとやや敷居が高く敬遠する向きもあるようだが、地域の女性たちが継承して来たこの工芸品を、村の誇るべき特産品としてさらに育成振興していって欲しいと思う。

文／浅井登美子　写真／小林恵

上／糸芭蕉を整経して縒る
中／日ざしを避けて機織り
下／国指定重要無形文化財「芭蕉布」の保持者・平良敏子さん（人間国宝）

・芭蕉布会館☎0980-44-3033
・喜如嘉芭蕉布事業協同組合☎0980-44-3202

荒蒔邸の外観と内部の囲炉裏のある居間

古民家に泊って里山再発見

里美［荒蒔邸］［沼田邸］（茨城県常陸太田市里美）

人が住まなくなって朽ちていくままの古民家を何とかしたい、手を入れて活用させたいという思いから始まった白石さんたちによる古民家の宿つくり。古くてすきま風も吹く家だけれど、囲炉裏もかまどもある懐かしくて楽しい家。会員制の宿「荒蒔邸」に次いで、今春には「沼田邸」も開館することになった。

阿武隈山麓里山の魅力がいっぱい

旧里美村は茨城県の最北端、阿武隈山系の山々が連なり、山麓には清流、牧場、温泉、水田、果樹園等の豊かな自然が息吹いている里。水戸市から福島県へ向かう国道349号は里美地区の「道の駅さとみ」あたりから山並の迫る里山らしい風景へと変り、さらに北上して田園地帯を西側の旧道に入ると、街道の面影を色濃く残す市街地になる。また、東側の道に入っていくと、林業で栄えた時代を語る古い家屋敷が立ち並ぶ集落がある。会津から関東への入口、農林業で栄えた頃の賑わいが偲ばれる佇まいである。

国道沿いには農産物の直売所やお母さんたち手づくりのそば・うどん店も点在し、活気に溢れている。美味しいものを食べ、この地区の歴史や自然を味わってみたいと思った。

古民家を保存するために

古民家の宿「荒蒔邸」は、市街地のど真ん中にあった。豪農だったという荒蒔家の面影を刻む表門を入ると、中は広々とした庭園になっていて、古い大きな民家が建っている。訪れる人の少ない冬は、日だまりの中で昼寝を楽しんでいるといった趣だ。

敷地は約400坪、民家は78坪で、土間を上がると囲炉裏の板間が二つ、奥に15帖間から6帖間までの畳部屋が5室あり、自炊できる台所や風呂等がある大きな家である。築150年というだけに、今では手に入らない巨木の梁で構築されている。

荒蒔家はこの辺の地主で米問屋を営んでいた。そのため家の前には米を収納する蔵が並んでいたそうで、現在も庭には3個の蔵が残っている。

しかし荒蒔家の人々は東京や水戸市へ移住、道路脇に作られた離れ風の家は時々利用されてきたが、大きな民家は空家となって閉じられ、風通しの悪い部屋が崩れ出していた。

それを危惧したのが白石智洋さんら地域おこしに関心を持って来た人たちだった。伝統的な古民家を保全しなければいけない、再生して活用できないかと模索を続けた。持ち主、村等とも相談、有志で里美ツーリズム探究会

酒店、豆腐作りも忙しい白石泰子さん

世話人代表の白石智洋さん

▲沼田邸は「自然との共生宿」をめざす

3月にオープン予定の「沼田邸」

を結成して改装費を捻出、会員制の交流宿泊施設「荒蒔邸」を立ち上げた。

年会費1万円の会員制の宿にしたのには理由がある。改装した当時、住民に解放したところ、若者がロック演奏したり、カラオケ用に夜遅くまで使う人たち出てきて、近所から苦情が出るようになった。そのため、会費を払ってきちんと利用したいという都市や市外の人を対象に、民家で田舎暮らしに触れ、里美地区をゆっくりのんびり散策してもらう交流宿泊施設にした。

各々「無理しない」おつきあいを

施設は会員1口につき4～8名まで利用出来（4名以下はダメ）、利用料は一泊一名2000円。グループで利用することをめざすが、同日に他のグループと共宿することはしない。「良く利用するご夫妻は、4人分8000円支払って家族で来たり仲間ときたり、場合によっては二人で来ています。里美には温泉もあり新鮮な農産物や食品も売っている。だからここでは、かまどでご飯を炊き囲炉裏で煮たり焼いたりして食事を楽しみ、広い家でのんびり休息してもらいます」

一日一組にしているため年間の利用者は300～400人と多くはなく、料金も安いので、改装費200万円の返済（別途に200万円を村が助成）、大屋に支払う家賃50万円を除くと、会としては年一、二回打ち合せ用に食事代が出せる程度だという。

里美グリーンツーリズム探究会の役員は5名、うち荒蒔邸の世話人として実務に関わっているのは白石智洋さんと白石泰子さん。白石代表は「道の駅さとみ」で店長を務める。連絡事務や掃除、シーツの洗濯等を担う婦人部長の白石泰子さんは「満寿屋」酒店の奥様。利用者の多い夏はかなり多忙で、家業にも影響しているようだ。

「当初は食事を出すことも考えたのですが、お金を取ることになると、どんな食事にしたら喜ばれるかとか、もっとサービスしなくてはとか考えて無理をしてしまいます。それは止めようということになったんです。一人でも多くの人が里美に来てくれればと思っていますが、田舎の人がいろいろサービスを提供して、都会の人はそれを当たり前として受け止めるという交流の仕方は良くないと思うんです」と泰子さんは言う。

▲荒蒔邸のかまど。おコゲのある美味しいご飯が炊けると人気がある

泰子さんは主婦の仲間と休耕田を利用して大豆を栽培し、豆腐を作っている。一日30丁しかつくれない特選豆腐で、客は予約待ちという。満寿屋には地域おこしに熱心な女性たちが打ち合せ等に使うレストラン風のスペースも設置されていた。

「田舎の人は仕事の他に地域の役職や共同作業もあって皆とても忙しい。荒蒔邸は利用者が自由に勝手に使い、田舎暮らしを実体験してもらうことが狙いです」という白石智洋さんは、たまには都市の人たちに喜んでもらいたいと、自慢の蕎麦打ちを披露する。目下は、囲炉裏で子供たちに里見の民話を話す会を開きたいと、語りべを探している。他に青大豆豆腐・蒟蒻料理、季節の山菜料理、川魚料理等も予約すれば用意できるとのことだった

現在改装中の民家「沼田邸」は小中集落の山際にあり、古い農家の佇まいを残している小さめの家。屋敷の前は庭木と池と畑、家の裏は雑木林と竹藪で、会ではこの家を「自然との共生宿」として貸出す予定だ。8年間無人だったため整理と改装に手間取っているが、費用の一部を県が交流推進施設として助成してくれることになった。タンポポ、すみれが咲く3月にはオープンしていることだろう。物置を利用して会事務所も設ける予定だ。

なお水戸市に住む荒蒔さん夫妻も、里美が一番好きだと言って毎週のように隣接する離れ家に通って来ている。民家に来る人とも親しくなり、自慢の里美茶を煎れて縁側でもてなし、お喋りするのが楽しみとか。庭の植木や銘木の手入れも欠かさず行っており、田舎の良さを味わってリフレッシュして欲しいと語っていた。

荒蒔義保さん、志津子さん、表門の前で

・里美グリーンツーリズム探究会☎090-3914-5337（白石）0294-82-2013（満寿屋）
www.yuu-group.co.jp/kominka/

プロ農家をめざす人を農家と大学が支援

（北海道深川市）

大学で2年間農業の基本や農業経営学等を学びながら、研修ファームで新規就農に必要な技術をしっかり学ぶという就農希望者のための大学（短期）が北海道深川市にある。拓殖大学北海道短期大学と新規就農サポートセンター、地域の市町村やJAが協力して行なうもので、平成14年に創設され、現在6名が卒業、就農を果たしている。

まず就農希望者は東京や札幌で開かれる新規就農フォーラムに参加して、的確な就農イメージを持っているか等がチェックされ、面談を経て合否が決まる。合格すると、1年次は農業の基礎知識と基礎技術を4～7月と11～2月に効率的に学び、8～10月の3ヵ月間は農家で農業研修する。2年次は7ヵ月農業研修するが「有給」となり、月額7万円の研修費が支給される。他にも奨学生制度などが利用できる。

NPO法人新規就農サポートセンター（深川市）☎0164-23-2710　拓殖大学北海道短期大学☎0164-23-4111　東京連絡事務所（大学）☎03-3947-7869

ボチボチ村移住プロジェクト長万部で無農薬農業を！

（北海道長万部町）

15年前にスタートした町おこしグループNPO法人「おしゃまんべ夢倶楽部」が母体で、無農薬農業を移住者に取り組んでもらおうと「ボチボチ村」を立ち上げた。年間3000円で貸す農場（1区画30坪）で無農薬農業をすることが条件で、年齢も経験制限もない。場所は長万部温泉街から車で5分ほどのところにある丘の上。町から無料で借りた1haの土地で30区画あり、管理を地域や会の人がしている。小さいので機械もいらず、気軽に農業が楽しめると好評で、定住者もいれば本州から通う夏だけのファーマーもいる。

おしゃまんべ夢倶楽部☎0137-72-4666

北上山地の登山や山暮しをガイド

（岩手県川井村タイマグラ）

岩手県の早池峰山は豊かな自然と信仰の山、山岳農業の長い歴史がある。山で雑穀や大豆等を作って来た農民たちは減ったが、タイマグラ地区には空家を利用して移住して来た人や別荘地として利用する都市住民が増えている。19年前に大阪から移住して山小屋を営みながら登山ガイド等をする奥畑充幸氏ら7名が「早池峰エコツーリズム推進協議会」を作り、登山、田舎暮らし体験、自然観察、山仕事等のツアーを実施している。宿泊は山小屋で一泊二食付5000円。問い合わせ☎0193-78-2888山小屋（相沢さん）

奥会津地方の伝統工芸の技を体験

（福島県南会津町）

奥会津で昔から伝承されて来た生糸・草木の繊維を使った織物、染色の技術にふれ、体験してもらおうと、県立奥会津地方歴史民俗資料館では「森の交流館」で体験教室を開いている。特に藍がめを利用した藍染めを技術伝承者から研修できる。うさぎの森キャンプ場のコテージに宿泊し、自然散策を楽しみながら体験することができ、女性グループに人気がある。費用は6000円（宿泊・食事・材料費込）森の交流館☎0241-66-2108

「さめかわ・ふるさと体験学校」

（福島県鮫川村）

田舎暮らしや農村との交流を希望する人を対象に、年数回「ふるさと体験学校」を開催している。今年は、4月末～5月に田植え、7月に田の草取りと赤タル見学、9～10月に稲刈り、11月下旬に凍み豆腐、こんにゃく、豆腐作り等を計画しており、地元の人たちとの交流会や、移住者の住居等についての相談も受けている。鮫川村企画調整課☎0245-49-3115

情報関連企業を集積

（山形県白鷹町）

山形市や米沢市へ約30km、最上川沿いの田園地帯で、平成14年よりレンタルオフィスを整備し、30坪と70坪のロッジ風オフィスが6棟あり、月3～5・7万円で貸出している。これが「ソフト小村」という情報関連企業の集積する小さな村を形成している。各棟はオフィス、ミーティングルーム等がある快適な建物で、周辺の自然環境と併せて好評。都内から移住を希望する企業もあり、土地区画整備事業も検討中。白鷹町政策改革課☎0238-85-2111

雪国の農家民宿で自然や農業体験

（新潟県魚沼市）

豪雪地帯で、早くから「山菜共和国」でアピールした旧入広瀬村では、都市との交流活動に力を入れ、宅地分譲や温泉、民宿等の整備を行なって来た。現在団体から個人まで13軒の民宿が登録され、雪下ろし、かんじき作り、山菜取り、ハイキング、田植え、餅つき等の季節に応じた体験メニューを豊富に提供している。魚沼市地域振興課☎025792-97-52

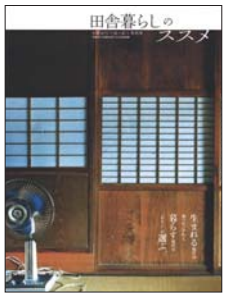
体験滞在して、田舎暮らしへ

（愛知県豊根村）

人口1500人程の小さな村だが、交流事業や宿泊施設が整っているため、年間を通じて都市の人が訪れ活気がある。大学生の「インターン事業」、小学生の「山村生活体験宿泊事業」、家

◀国頭村「楚州あさひの丘」のカヌー教室

「田舎暮らしのススメ――交流居住の先進自治体事例集」



「交流居住=交流を主たる目的として田舎と都市を行き来するライフスタイル」を提案する冊子で、交流居住のための事業や交流施設等に熱心に取り組んでいる市町村等の最新事例を紹介。これらの交流事業や施設を利用して田舎暮らしを楽しんでいる人たちの「私の田舎暮らし物語」を4例、市町村等の交流居住に関する取り組み「ようこそ、我が町へ」を30例、受け入れ窓口一覧。

[De POLA]30号（2006年3月5日発行）特集／田舎と都市の新しいライフスタイル「交流居住」時代

■自然とムラの人々に魅せられて――「森と風のがっこう」他（岩手県葛巻町）、都市からの移住者を地元でサポート（福島県田村市都路町）、スキーの聖地でインストラクター（北海道ニセコ町）、石釜でこだわりのパンを焼く（北海道真狩村）、知的家具で甦った廃校（蘭越町）

■田舎でもう一つの生活を楽しむ――奈良県曽爾村クラインガルテン、別荘暮らしで始まったもう一つの人生（長野県小海町）、都市交流事業は地元住民主体で（宮城県丸森町）

■和歌山県へ交流居住――カヌーを通して田舎暮らし（日高川町）、山のてっぺんに理想郷を作る（美里町）他

編集後記

▼地方取材を終えた12月初旬「危険クマ5000頭捕殺」という新聞記事が小さく報道された。環境省の報告では春から秋までにヒグマ327、ツキノワグマ4723を捕獲し殆どが射殺されている。生息しているクマ約1万頭の半分を殺したことになる。昨年はどの山にもブナもドングリも実一つなく、里へ出て射殺されたクマの胃の中は空っぽが多かったという。「De POLA」31号で「よみがえれ！ふる里の命と自然」特集をし、クマの魅力や共生についても提案したのに残念だ。雪が解ける頃になると春熊猟もはじまるという。このままでは日本の森からクマが絶滅してしまうのではと心配だ。（浅）

▼交流居住特集では、地方出身の中高年者がグループをつくって、故郷にいる親達や高齢者福祉施設へ介護に、または山仕事に出かけるケースを探したが、見当たらなかった。心当たりの方は連絡して欲しい（A）

De POLA No.32

［でぽら］2007年春夏号

発行日／平成19年3月5日

発行所／財団法人過疎地域問題調査会

〒105-0001　東京都港区虎ノ門一丁目13番5号
第一天徳ビル3階

☎03-3580-3070　FAX03-3580-3602

http//www.kaso-net.or.jp/

編集協力・印刷／株式会社ぎょうせい
編集工房アド・エー

INFORMATION

族や大人のための交流滞在施設も2カ所あり、ブルーベリー畑での収穫とジャム作りが人気。またどっぷり田舎暮しをしたい人には一戸建ての「つみきハウス」が3カ所に9軒ある。賃貸料は単身向けが月1万5000円、世帯向けが2万円と格安。2年間使用と決めているが、そのまま住みたいと言う人が多いという。豊根村総務課☎0536-85-1311

和歌山田舎体験と熊野詣「ふるさと定住センター」（和歌山県古座川町）

古座川町にある和歌山県立「ふるさと定住センター」では、かつて農業試験所だった広大な農地と農業技術を活かして、就農希望者、移住希望者のための農業体験講習と移住に必要な情報提供を行なっている。Uターンした人に話を聞く場も設定し、移住者の集落として知られる那智勝浦町色川地区を訪ねる手配も。同センターには宿泊施設はないため、希望者には宿泊施設も紹介してくれるので、那智山や那智の滝等の観光と併せて出かけるのもおすすめ。☎0735-78-0005　担当／那須

クラインガルテンとセカンドハウス村（兵庫県朝来市）

山内地区の棚田を活用して「クラインガルテン伊由の郷」を設置、農園付きコテージが26戸ある。1区画の面積は184～391㎡、農園は50㎡あり、利用料は1カ月32000円～48000円。またさのう高原には分譲地があり、自然林の中に1区画約300坪の広々した面積と環境の良さが人気で、現在30戸の別荘がある。周辺には観光地や温泉、スポーツ施設も多い。朝来市産業振興部☎079-672-2774

地域住民の手で移住を支援（徳島県美波町）

大平洋に弓状に面した漁業の町・伊座利では、地域住民の手で「伊座利の未来を考える推進協議会」が発足、小中学生を対象にした交流活動に取り組んで来た。親子の漁業体験教室、クルージング、磯遊びも。交流施設として「にぎわいの館」があり、1泊3000円で宿泊できる（バス、水洗トイレ、キッチン付き）。頼めば漁師さんが新鮮な魚を届けてくれると好評で、この館には現在10世帯が長期滞在している。協議会☎0884-78-1185

廃校を生かした交流施設「楚洲あさひの丘」（沖縄県国頭村）

国頭村東部の入り江にある海と山を望む美しい景勝地。廃校になった元楚洲小中学校の施設を活用・改装して、交流施設として数々の事業に取り組んでいる。1階はデイサービスセンター、生活支援ハウス、保育園、2階は宿泊・研修施設、ラウンジがあり、与論島を望む大浴場やウェイトトレーニング室、野外バーベキュー施設等も新設した。体験メニューとしては、追い込み漁、茶摘み、伊江川探検、クイナ湖カヌー等があり、体育館や校庭を使ったスポーツ合宿も人気。一泊一人小学生以下宿泊2000円・朝夕食事1000円　中高校生2500円・1000円　一般3000円・1500円　☎0980-41-8888　URL http://www.asahino-oka.jp/

パイナップルやマンゴー畑で農業体験（沖縄県東村）

ゴルファーの宮里兄妹の出身地東村は、やんばるの森と青い海、パイナップル畑が広がり、青少年を対象に自然体験、漁業体験、農業体験ツアーを村と住民が連携して実施している。人気はパイナップルやパパイヤ、マンゴーの栽培や収穫を体験するプログラム。一度に20軒ほどの農家が受入れ先きとなり、県内外の修学旅行生が地元の人と交流する。自然体験ではマングローブ群生が広がる慶佐次川のカヌー、トレッキングが人気。東村観光推進協議会☎0980-43-2931

DePOLA [でぽら] NO.32
平成19年3月5日発行
発行／財団法人過疎地域問題調査会 〒105-0001 東京都港区虎ノ門一丁目13番5号 第一天徳ビル3階 S 03(3580)3070代

あなたの夢で、最高のシーンが生まれます。

やっほー、いくぞー、はやいぞー
ゴールには どんな
ステキなことが待ってるのかな。

うんしょ、こらしょ、もうすこしだ
パパより、鳥より、あの森よりも
高いところをめざしちゃう。

宝くじの収益金は、
身近な街づくりに役立っています。

宝くじ

財団法人 日本宝くじ協会
当せんはしっかり調べて、しっかり換金。
http://www.takarakuji.nippon-net.ne.jp

●外国発行の宝くじを、日本国内において購入することは、法律で禁止されています。